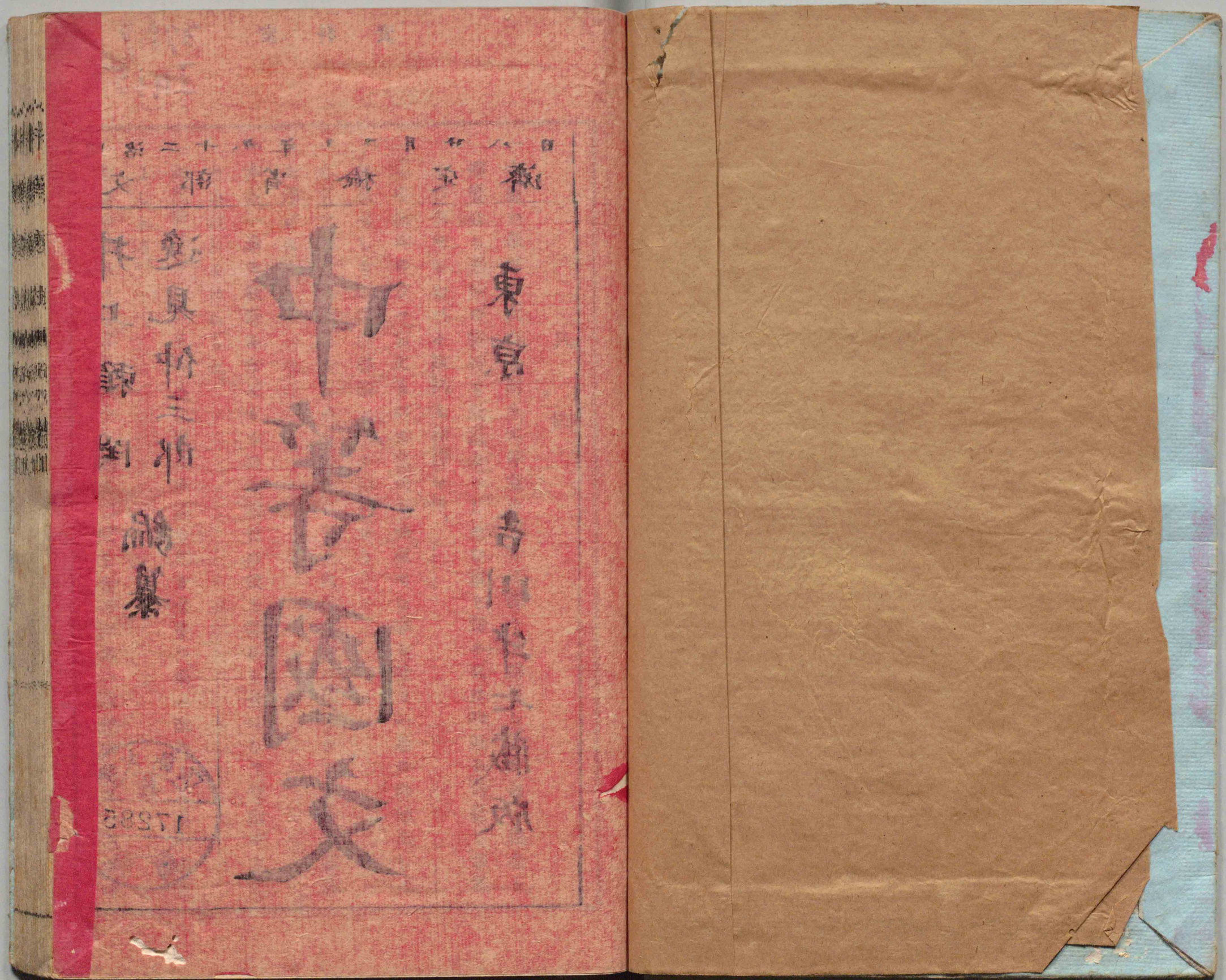
中等國文

五の巻上

375.9
In15
資料室

30350
教科書文庫
3
810
41-1896
20000
17285
M29
1896


東京
古川半蔵版
鄭夏卿三郎
鴻集
文部省
大学校
東京図書

資料室
375.9
Ini

明治二十九年十二月廿八日
文部省檢定濟

井上賴圀
逸見仲三郎 編纂

中等國文

東京 吉川半七藏版

廣島大學圖書
17285

廣島大學圖書

凡例

一本書は、教育の大詔ふ則り、文部省の新令に據りて編纂し、專、道義の觀念を確實にし、奉公の精神を旺盛ならしめむ事を務め、又は知能を開發し、事業を作振せしむべき事柄を採擇せり。

一本書編次の方は、前文を以て後文を喚起せむ事を計り、一卷の終始をして照應せしめ、順次相聯絡すべく排列せり。

一本書中、作者の明なるものは、題目の下ふ氏名を掲げ、然らざるものは書名を擧げたり。

一本書、一章を數節ふ分てるもふは、讀習の便を計れる者にして、章段の上にのみ據れるにあらず。

一文中、語法の誤れる者、又は事實の違はざる者等は、或は改めもし或は省きもしたり。

一本書の紙數は、學年を三十五週と豫定し、初年級には教授時數を毎週四時

間とし二年級以上には毎週三時間と見積り、一時間ゐ教授せむ量を、凡一教とし、四年級以上は行を増し字をふやしたり。

一語格文法は、第二巻より本書の頭註に之を附し、文章を講讀すると共に、併せて知らしむべく物せり。然れども言語の組織法、及、分類法等を詳にせむゐは頭註の能く盡す所からねば、別に其の捷覧圖を編して、參資ゐ供せり。

一送假字は、言語の性質ゐよりて、もとより一定の法則あれど、略それによれりと雖、單ゐ法則のみ泥む時は、却りて、その時代の文体を失し、語勢を傷はむ恐なきにあらざれば、讀方の難易を量りて、添へもし省きもあたり。

一書牘文は、實用を主として、強ゐ文則に拘らざる者ゐきば、世の慣例ゐ任せて、編者の意を加へず。

一教授法は、編者の意旨なきに非ざれども、今これを開陳せず。本書を用むて教授せらるゝ人々の使価によりて、其の完全ならむ事を希ふのみ。

中等國文五の巻上

目次

第一　國を豊ゐ俗を厚うす　松平定信
第二　陶化　松平定信
第三　僕八介　伴資芳
第四　櫻をめづる詞　權田直助
第五　花の宴　久米幹文
第六　根來の花　加納諸平
第七　四季の月は今様　石川依平
第八　大倭詞　大國隆正
第九　寄附帳のてしがき　大國隆正

第十　浪華の嵐　依田百川
第十一　木村重成　依田百川
第十二　海ゆらば　木村正辭
第十三　對鷗亭記　近藤芳樹
第十四　彰考別館の記　安藤爲章
第十五　廣島國學院開院を　小中村清矩
第十六　大鏡をよみて　小中村清矩
第十七　蓮を見る詞　加藤千蔭
第十八　松下の泉を詠める　八田知紀
第十九　音韻反切　清水濱臣
第二十　言葉のさだまり　本居春庭

第二十一　西行法師　上田秋成
第二十二　花の歌　西行法師
第二十三　月の歌　西行法師
第二十四　題志らば　西行法師
第二十五　驛　中島廣足
第二十六　岡部日記　岡部眞淵
第二十七　消息　石川依平
第二十八　蟲　石川依平
第二十九　秋野の花　藤井高尚
第三十　赤坂御園の菊をよめる　久米幹文
第三十一　夜學　中島廣足

第三十二　學の喻　伊達千廣
第三十三　契沖の古學　本居太平
第三十四　萬葉代匠記序　僧契沖
第三十五　車　坂正臣
第三十六　車の直路　本居豐穎
第三十七　汽車　本居豐穎
第三十八　嚴島紀行　稅所敦子
第三十九　松島の記　久米幹文
第四十　言志　久米幹文

中等國文五の巻上目次終

廣島大學圖書之印

中等國文五の巻上

賢主ありて云々の一句先本論の主意を云ひいだせり

第一　國を豐ゆ一俗を厚うす　松平定信

今昇平百餘年云々の一節ハまつ奢

天地の道、暑さ極れば漸ゆ寒となり、寒極れバ漸ゆ暑となる。人の道も盛ある事極れぬおとろへ、衰ふる事きはまれば盛るる方ゆ向ふ。然れども衰へたるもの、自然に盛あるゆあらず。賢主ありて、よく其の紀綱を改めかへざれバ、國勢日々ゆおとろへて亡ぶるゆ至る。たとへば、琴瑟の調ゝ、のをざるを、其の柱をたてかへざれハ、音節つひゆかなをざるが如し。今、昇平百餘年ゆして、奢侈

侈のよりて生ずる所以をとけり

むかし萬乘の君よりて云々以下の數節は古人儉素のさまを說きて今世の奢侈をいましめたり

日々よ長じ、風俗日々にうもく、困窮日々に甚く、詐譌日日よ生ず。故よ貴賤となく、衣服、飲食の外、平生日用の器物、或て翫弄の品よ至るまで、いつとなく美麗驕奢を極むるも忽、財用たらずして、困窮よいたるもの殊ふ多し。むかし、萬乘の君よて象牙の箸をこしらへしさへ、明智ある人をその奢侈を以て國を亡さむ事をいたみたり。今よてハ、唐もやまとも、士庶人よて象牙のはしを常の如く思ふやうにるり來きり。驕奢の風年月を經て、いつとなく長ぜるも忽なり。」近くて、方廣寺よ納められし豊臣太閤の遺物をみるに、太閤の御鼻紙として、うすき半紙を四つ折よして、其の間よ楊枝をはさまれたり。これよて

されバ費用日々よまし云々の句ハ上段の故よ貴賤とるく衣服飲

當時一切の模樣おしたるべし。其の勢蠻狄よふるひ、國尤富强よして、且、驕奢の名ある人さへ、猶かくの如し。今時よても、庶民よても、右やうはなな紙用ふるもの稀あり。」いとけなき時、古老の七八十年以前の事を語れるを聞きしに、當時よても、足輕體の人など、羽織を持ちたるを稀ある事よて、偶、津綟子は羽織をもてはきなるとき各かり用ひしよるり。又駿台雜話を見るよ、國初よれ、大夫たる人も、木綿の織物を晴着よ用ひし事も見えたり。其の外、今時の有樣と思ひくらぶれば、世をへだつるの如く覺もる事ども多し。」されば費用日々よまして、用度たらざるも忽、物の價自然と貴くありもくふ隨

食云々の句に照應す

ひ、昔たりし家も支度たらざれば、人の財貨をかり、つひに償ふ手段なければ、種々の奸偽計をかし、風俗いつとなく破れおとろへ、訟獄日々ふえあらず。諸侯大夫に至るまで、下ふ聚斂して上に諂ひ、君を小人を親愛し逸樂ふけり、驕奢極なうして用度足らざれば、大夫以下職にあるもの、其の罪を掩ひむとて、國民を掊克して足らざれば、三都の間、富商大賈の子錢をかり、眼前のきずをいやし得れども、限あるものを以て、限なき事に志たゝへむ、いつ足れりと云ふ時もなく、あれみを商賈に乞ひ、鄙陋いたらざる所なし。これ皆ことを用ふる者、政の要

奢侈の弊誠に恐るべし

もし此のまゝにて云々の句讀みきたりて心の寒きをおぼゆ

以下風俗を正し國を豊ならしむる道を說きいづ

誠の心本論の主意全くこゝにあり

務を知らず、君を正道に導く事能はずして、却りて洗ひがたき汚辱をうけ去む。悲むべきことの甚きにあらずや。もし此のまゝにて凶年にあひ、或は測らざる變あらむ、其の時をいかゞ計ふべきや。螻蟻をら冬の食物を貯ふる智あり。堂々たる千乘の君にして、螻蟻にだにあに笑はるゝ事を口惜くおもはざるかや。さてかく衰へたる風俗を、たゞきむとならば、是までの形はてゝ、以ての外明智の人ありともせむ方あるまじきなり。琴瑟のたとへの如く、其の本を改めたゞして、後、仁政も行はるべし。其の改めたゞす本は、君と政をとるその大夫に、誠の心だにあらば、掌をかへすよりも易かるべし。誠の心とは、

きわめて儉素を守りて民をあれむ心あり。此の心あらば、其の他をこれふよりて、條理自然ふ備る事、鏡を以て物を照らすよりも明かり。是歴世、おほくの聖人れ明教あり。凡の人ふ心までて、迂遠ふるやうふ、思ふべけ事ど、實ふ國を富し、太平の基をひらくの道て是ふありて、聖人いで給ふとも、是より外てあるまじきなり。

第二　陶化

松平定信

異見をいてむまて、先、わが云ふべき所の筋を自さくと見るべし。人の短慮ふして、事をいそぐを諫めむと思えば、われハ如何と見るべし。思の外、わが本性緩を好みて、事々ふ由るやうありと、人ふ問てるく事もあらむ。されバ、わが緩ある所より見るゆゑふ、短慮とも思ひ、事いそぎすとも思ふなめり。短慮ゆゑに物ふかどありて、人の柔順のやうふハあらねど、その角あるによりて、人々憚りて、よき事もあり。事いそぎして、明日の事を今日よりさわぐを、煩く心のどのならぬやうふ思へど、それゆゑふ物に逐るゝ事あり。われハ明日の事をあすふありて、俄ふ驚きあてゝなす故、間違も出來、事ふも後るゝ事あり。されど、害ふきがありか、ふをゞよき方につくべし。短慮なるより暴怒して、心の外ふあらそひ事などあるて失なり。されど、是非面折異見せむと思ふを、その暴怒でのりなり。かの暴怒を、癇癪よりおこるなり。理窟いひ

聞のせても、病を治せず。氣を鎮めよと云ひても、上昇を治せず。それよりも、其の症によりて、抑肝補肝の劑を用ふれば、異見の言葉を費さずして、近頃ハ氣がよくなりぬと、人々いふやうなるべし。されば始より異見いたむと思ひしも、皆わが本性とも、うらはらのたがひ故なり。彼もかならず我が遲緩して、事ゆたくるゝを諫めむとおもふべし。然るに我がかさより、其の性急を異見せば、げに尤とも思ふまじ。尤と思はずば、異見をも聞のざるべし。かく思慮せば、つひに異見をいはでやむべし。もべて此の如くなるものあり。

さて、酗酒をする者く、氣の毒に思へど、我が下戸の日より見る故なるべしと思へば、これも強ひて諫爭をるに及ばざるなり。よしいふとも、下戸の心より酒をとがむとて、聊も用ふる心なのらむ。夫子も、わきまえ諷諫に從ひむとのたまへり。どにかく、人の爲を思ふ故に、諫爭をるがもとなれど、ともすれば言ひつめてやらむ。一言もいはせじと、勝氣の心まてて、誠の深切をうすくなりぬべし。それまてて、いかでか、感動せむ。其の言に從はざれば、はや絶交せむなどゝ、淺き心にて諫めむと思ふに、思ふかたのあしきにもあたるべし。そのあしきをもて、人に云ひかさむと思ふに、人の服せざる基なるべし。されば、異見いたむと思ふ、わが方をかへり見て、人をづれに酒

を忌む心より、かく思ふよやとかへり見、又、其の外よも、彼の如くふ、酩酒をる者いの程もあり。既よ古人も酒にのぞみてハ、過ちたる人もありきと思ひかへせど、腹たつをも厭ずず、云ふよも及むどと、思ふやうよも、思ひかへすべし。

故よ先彼の過をこれをり。云ふべきのいかゞとわれよかへり見、人よ見くらべて後よ考ふれど、事穏よして強くていふまじとの思慮つくをり。我が心の筋をよく考ふれど、云ずともをむ事もあまたをるべし。おまどひよ云ひて用ひずとて争ひ、つひよ交をたちて高潔をるやうよ思ふも、これも我が癖をり。その氣より、人をむ

一點の疵をきやうよとおもへど、その疵と見る所を、我が物ぜきよてもやあらむ。上戸をれバ、彼ハ惜き人のな。をこし酒のみて、漸醺の佳境を得ぬむ、ありがたき人ぬるべしと思ひ、下戸をれど、彼の酒よて一つの害ををす。酒のまずバ、よのらむと思ふ。されど我が物ぜきををて見れど、さして一々諫諍するほどの事ハ少のるべし。よく〳〵目にあまり、人も何のと云ふやどをらど、諫諍をべし。さて其の諫諍よも品々心得ある事よて、一時一事の事をらど、云ふべけれども、はや事をみて仕方をきことをせむなし。たゞあしかりきと思をするのみれ事をらど、云をどともありなまし。又かゝる事あるべしと

思むバ、その前轍をひきて、後來の為ま云ふ事ハあるべし。それもをみたる事を志ひて云へバ、怒をふくむハ人情なり。此の如くまてて詮なきめみの。害も出來る物なりと知るべし。

かの薫陶とて、陶器を作るろくろれ上の土、手ま應ドて茶碗、徳利などになりて、土も知らずして、形をなすを云ふ。これて其の明く所をよく知りて、その約をいるゝ窓ようすといふ如きゞ本と知るべし。明く所を知らずして、入るべき門戸を知らずして、人の家へ入らむとをるゞ如くまて、其の堂室へて入るべからず。堂室ま入らずしてて、いのでで其の主人まあふべき。主人まあてずバ、

用もなく、せんもなき事まいたらむ。さて聞きおよびたることを、一つ二つ志るすべし。ある狩人、鐵砲まて猪鹿をとることを、殊の外まこのみて業と志けるを、其の母うれひて、ある老僧をたのみ、此の殺生をやめさせ給へと云ひけり。老僧うち聞きて、氣の毒まれもひ、其の狩人まあひて、殺生好むまし聞けりと云へど、必禁ぜらるゝ事と思ひて、いのま説法し給ふとも、此の殺生をやめ難しと、いひ出したれど、それを汝ゞ職業の事ぞいのでそれを禁ずべき。只いふ事あり。鐵砲まてうちたる時、いづこへ玉あたり、いのまたふれ、いかに聲をあげ、手足を動ゝつひま死ぬる時をかくありきと、一々それま心をと

どめて、志のと忘るまじ。かくせむ人のほど殺生しても、苦のらずと教へしのむ、その教の如くなしてけきむ、終よ忍びざる心いできて、それ殺生をやめにあり。

又ある者至りてよき者なるが、一つの癖あり。その癖だになくむ、名をもあげ、人よも用ひられ、世の寶ともあるべきが、一癖いのふしても改むべきさまふあらず。さて其の者至りて茶を好みて、よき道具をバ、何よもかへがたく思ふばのりけさまなり。それよかの癖を異見せむとて、古渡の南京の皿十枚を持出でて見せれバ、涙こぼして賞し、この舶來け磁器十枚そろひてあることなど、天下よ類なのるべし。又あるべしとも思されずとくりかへし歎賞をるとき、鐵槌を袖よ入れて、その一つを微塵よくだく。かれ、その驚きをしみたるさま、云てむかさあし。色を失ひ涙をこぼして、失心せずやと思ふ氣色なりしのむ。我も失心せず。此の皿十枚をろひし故よ寶ともいふふり。汝の所行よきところ多けきど、一つ此の筋よかけたるも、南京の九枚よなりきとおなど事よ、我ハ惜むなり。此のかけを拾ひて守よすべし。これを見て躬行のいましめよせよとて、其のかけをやりたれバ、又涙をこぼして、そのかけを持ちゆき、つひよ過行を改めたりきとかり。

第三　僕八介

伴　蒿陵
資　芳　江戸の国
手開田子　八幡

大石良雄、赤穂城をのいて後、志ざらく其の城下に在りて事を辨へ、京へ登らむとせる時、もと使ひたりし奴僕八介といふもの、おなじ城下に住みけるが、訪ひきていふ。我も御供して、京へまゐり侍らむを、今ハ老いはてぬまで、心よもまうせず。これハ、御對面たまる限るらむと、御なごりいとむ方かし。たゞし何ゆまれ、御のたみの物を賜らバ、身のあらむ限、御傍よりべる心地ならむと良雄うなづきて、げにことわりなり。何ぞこらせむと、あたりを見れども、調度どもゝ、や半ば京へ送りのこれるも荷づくりしたれど物かし。硯の入りたる箱一つあるをあけたれバ、金二拾片ばかりあり。せめて是をとて

與ふるよ、八介大よ息まきて、たゞちよ投返し、是の何のかたみぞ。身こそ賤しけれ。心をさばこのりならむや。此のたび、殿の不意よりくならせ給へるを、吾等ごとき者だに限りかくかなしくロをしきふ、ためしゝと城を明けて、をひ出づる心よくらべらるゝ。今をかさみもほしからずとて、走りいでむとするを、さすがに良雄なれバ、志ひてとゞ色、いとことわりなり。我あやまてり。あまりよ與ふるものなきを、の事ぞ。今、おもひよ思たること有りとて、墨をり、あり合ふ紙ひき廣げて、編笠着たる士の、奴ひとりつれたるかさを書きて、是をおぼえたりや。我がわかゝりし日、江戸よありて、汝を

つれて物へまゐりける折のさまなり。是をかさみともなりなむやと云へど、忽大ホよろこびて、これ〳〵是はまさる御ゝさみなし。其の時ハかくぞありし。かのをりもどありけるあど、昔がさり〳〵て、泣く〳〵いとまごひして歸りけり。其のかけるもの、奴ゞ女の聟に傳へ、その主なり〳〵城下の醫生の家ハ、今も珍藏せりと、其の國人れ話なり。義士けやつこハ、朴實清廉の者ありけるハ、まことに美談とぞ云ふべき。

第四　櫻をめづる詞　櫻田直助

世の中ハ花も多けど、たぐひなくひでたるものハたゞさくらの花ハなむ。この花ハ春まち得て、こちふく風ハ

古今集ハ櫻花咲きまけらーなあ引の山のかひより見ゆるしら雲　みよしの、山べよさける櫻花雪うとのみぞあやまたれけるいつまでう野べよ心のあくがれむ花ーちらずゆ千代もへぬべし　世の中よたえて櫻のなうせバ春の心ハのどけからまーるど見えたり　紀貫之のうたよけ

ひもを解き、のどうふる日影ハ忍まひ初めて、霞の中ハ薔薇ア、うら〳〵とにおひ出でたるを、いひちらずめでたくたとーへなくうるをしー。この花のさ死の盛ハあそて、もろ人の心の花も、ほど〳〵ふさ死いづべくなむ高嶺の花を見てハ、雲うとうたゞひ、風ハちる花を見てハ、雪うとあやーみ、あるを散らずバちよも經ぬべし。なうりせバのどけうらまーなど、ながめ出でーも、古のみやび男の、めでの餘のをさびハやあらむ。然れバ、志のぶゞ岡ハ、遊びてを、さ死ちる花にこゝろまどひ、隅田川ハ船を浮べてハ、堤の花ハうつろふ影ハ行く方を忘れ、飛鳥山ハのぼりてハ、たつことかたき花の蔭ハ日を暮すなど、か

かゝ峡う
山ト山ノ間
雪ふるとみたし
ヒタスラニ
ほくぶれ
花房離恋手
手ヲ一ツ一ツ
けるのみし
青を思ふ
時たるも
立つことや
ちき花の
かゲかな

ふのみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかけのゝ」本編ハ是等の歌句を以て對句法を成せり　うつろふ　ウツロカゲ　花のぶゝ岡云ゝ」隅田川云ゝ飛鳥山云ゝ」ハ疊句法一格なり

今日一日春ノ力
松デ区山アルコト
ヲ区ニ区ガルコトの
時歩所

よかくにあやし。あだなりとかなてハきけど思ひもよらぬ。

や人まどゝしの花ゐらむとて」ゐど、うち出でつゝも、ゐかわをられぬハ、此の花のさ死けさのりの色香ふかむ。

第五　花の宴　　久米　幹文

いづれの年よう有りけむ。てやう仕へまつりし殿の君、をさまれる世よも、亂をれがし忘れぬ御心よやおゝしまーけむ。あまさのさぶらひどもに、よろひ着てまゐれ。花の宴せさを給をむと、おほせられて、たましハ、後樂園の琴畫亭といふよ、まうけられぬ。例の木ぶゝき中より、瀧つ瀬のいゝばしーを、池よるゐれ入るあとり、中島の石のたゞぎまひ、老いたるる松ゆ、ゐびきくねりたるゐど

水戸公ノ邸ニ在リシ頃ノ事ニ
瀧ツ瀬ハ流レガ
石ノ上ヲ走ルコト
有様
曲リ
唐中島

古今集ニ今日こずバ明日ハ雪とぞふるかゝ消えずバありとも花と見よーやとあり。

条幹文　モトフミ
元ハ水戸ニ生レ小石川ノ邸ニ住ス屋号ヲ水野ト云フ

小手ハ全ク芝ノ手ノ中ヲオホヒノ
ことヲ武芝ノ手ニ着リ
一ツの品モノコト

たさるものよて、ゝと廣きおまへの庭よ、大ふるさくらのされこぼれたるゝ、今日こずむこぞおばかる。」軍の鼓どう〳〵とうちならす程よ、家の長をはじめ、人々さまざまのよろひきよそひて、ねりいでたる春の光よかゞやきあひて、花よもおとらぬさまなり。三さり四たりづつ、おまへの芝生よついゐて、御酒たまれど、えばうーはらまゐ志さる童の、柄おぎきひさげどりて、かさがさつきめぐらすよ、肱おーたり、さかづきさゝげもちてかたぶくるゐどハ、ふるき軍の則るゐべし。」つき〳〵食みはてゝ、幕の内外よなみゐるさるほどよ、風さとふきいでて花のほろ〳〵とちりかゝるハ、むこのー物語めきて

列ヨツラリ　静々ト坐ス
危坐ニテ
長柄ノ銚子
肉々

金塊集ハ源実朝ノ歌ヲ集メタモノニシテ那須野ニ狩セシトキ詠ジタリトイフ

金塊集はもの、夫のやなみつゝろふ小手のよあられたむしゐる那須野志のくろと見ゆ

狩の歌

またゐくをゐしかりけり。一人ゐ　小手のうへまちる花よりもをのゝふのいはちゐろげは見ゐるけふゐなゝ

とうたひいでつるよ、どのゝおまへ、なな〳〵とうちゐ

ませ給へる御ゐしき、いとこそうるはしかりしゐ。いま

もなゐおもゐのげ、ゐのめくこゝち志てなむ。

第六　根来の花　見物ノ眼ノ前ニ見ルコト　加納諸平

根来寺ハ六ゝよりも、今の道四里ゐりまて、櫻いとお

ほかれむ、長き春日のさゐりまも、むれつゝ人の問ふ所

まなむありける。今ハ十年ゐりまやちりぬらむ。高野

ふ登るをり、おのゐも立ちまりつれど、み雪ふる冬の頃

まて、こせ山の椿ゐらねどつら〳〵ま春のさゐりをこ

そ思ひしゐ。學ま暇ゐるき身も、よそまのみ聞きつゝ年經

ぬるを、此の頃いのでと、人々のそゝのかすま、いたづら

ま過さむハ、花の爲も心苦うて、ゐごとゐかりの旅裝し

て、やゐてゐて行く。かくて中島をもゐれて、並木の松原

まかゝる。風いとさむし。目路のかぎり、菜の花むしろ志

きわさしたるハ、心ある人のをさびまや。宝の國とこそ

ふとおもゐろれ。立ちめぐる青垣山をかぎりまてこ

がねを志ける御代のゐるのな。この花ま、一本二本道の

邊ま立てるハ、何となくさうゝ志げゐるを、かう小畠

ふあまるゐのり咲きみちたるも、かをりさへいとあつ

のゝくはてゝハおほとゐぶらま志ゐりいでて、やご

ゐつらゝまとあるより来れり

万葉集の歌のこせ山のつらゝ

根来寺ハ二年ハ大傳法院宣旨ヲ受テ新義開山ハ興教大師本山ハ根来寺ト氏ル初開ナリ

とをき窓さへ照らすらむとあたれる。ほどもなく田井瀬の川原よいづるふ、いと〳〵寒し。川邊の里よ志ぢしやすらひて、永穂堤をすぐ。風やう〳〵志づまりて、空のけしき鳥の聲も心地よげ元なり。大塔やう〳〵高くあらもれて、ゆとさだのふ見えさり。まことやこの寺ハ、むの一高野の何ぞし上人の、かくれぞと志めしまり後亂世の騒よ、こゝかしこのおわたたからを集へて〳〵ハ、いみじき兵どもをさへたりと、のへて、私ざまの庄園などいとあまたもたるを、法師ならよハ、似げなき事とやおもほしけむ。織田の君こと向けむとし給ひしのど、順ひまつらで年經たり。のれ君身まかられてより、いよ〳〵ますます、勢猛なるり勝りしあで、豊臣の君更よ千萬の軍を起したまひ、はやせめよ攻め、いやをきふ焼亡し給ひけり。さりけきバ、はたく荒渡りて、かくいのり猪の卧處とまでなりぬるを、治れる大御代の恵よ、やうやうかくそなりまたりとる。いよしへの百ぞ一つよもあらざめれど、こゝかしこて面影残りて、ちぐろよ涙さへもよほさる。元教　鶯の根來の寺ハあれふぐら猶さのりふる山ざくらの花。入立つ足もとよりをド本まりて、咲續きある下かげ、めでたしともめでたく、一本ごとよ心とまりて、人もわきも過ぎがてなり。かくてハ、七のあゆみよ、七歌よまむもをけあて。百千萬もいできぬべし。雪た

いやせめよ攻めいやをきに焼きハ重語法の精格なり

入立つ足もと云云ハ古今集の序の詞なりめでたしともめでたく云ハ重語法の精格なり

魏の文帝孝曹植を七歩の詩

を作らあめたる故事をよれり
古今集よりざて
こゝ我が世ハ経るむ菅原や伏見の里のあれまく
もをしとあり
古今集ゟ梅の香を櫻の花ゟ白ハせて柳の枝ゟさかせてしがるとあり
業平朝臣の歌ゟ世の中ゟ絶えて櫻のなゝくせバ春の心ハ長閑からまし
万葉集ゟ物皆ハあたらしさよしなき人ハふりたるのみ尊くありけりとあり

づかしき梢も、うを紅なるも、ほのゝかゝ匂ひそむるも、かつ〳〵ちり行くも、とり〳〵ゟ棄てがたくて、いざこゝに我が世を經るむとさへおもをろ〳〵や。松杉ゟ立ちき、おをりたるハ、緑の絲をたてぬきましたらむやうまて、打ちなびく絲櫻の、柳ゟ枝ゟさかせたるゟやと見ゆるも、さほ姫の心づくしさへ思ひやられて、げまたえてさくらのなゝりせをなりこのし。時おそきハさるものまて、おしなべてて今日ぞ盛なゝりける。今ハ中々枝ごとに心うつりて、千萬のあゆみゟ、一歌も出でがさくなりまたり。物皆ハあたらしきよしと、古人をいへきど、それさしもあらず。花の木も寺のさまも、ふりぬるこそめでたけ

れ。そもゝ〳〵佛のみちよ、上つ代ゟも種々の御掟ありて、齋會ゟ奴婢牛馬まゝ兵器など布施をるすら、いみゞきつみふりしをみだれよのあらいきさわぎゟ、奴婢牛馬兵器をものかを。千萬の健雄さへ集へて、たゝかけなくも、將軍の君ゝちを挑戰ひしハ、醜の志れ法師なりけり。あれ天正のやぶれなゝのり世バ、中堂金堂など、眼かゞやくまで立ちつゞきて、花の木おひたゝむかさもなからまし。山のたゝずまゝ、谷川のながれ、かぞゝのりのけしきを見るも、御軍の君だちの御恵ゟ、荒れてこそ、中々の花けさゝのりをありけゝと、今なむおもひめぐらされける。

元教　古寺の春ゝあるゞをおのれぞといをぬぞゝのり

古今集よいざけふ春の山べにまどうもむくれなゐなげの花のかげのえとあり

の山ざくら」のな」伴雄　枝かをすあたりの木々も匂ふまで志ざりざくらは春かぜぞふく」。久秋　いざけふを花はけくらしうぐひすの塒の夢をおどろのかまで」く、れなむおげのとぎんじたり。いでや夕ぞえ曙かくて見まーのは、今一入の景色なるらまーを、歸るさ遠きあさりなれば、さてしもえあらで、やう〳〵かへる。山づとまえまぶーけきど、花をることをかさく制したれむ、むあでまて過ぎむとす。見てのこやるどいひて、をのかき一枝手折るもあれり。さむれおのきもと心をかくれど、山ざくら咲くかげ高し家づとは一枝とこそたちをよりしの」打群れてものせる人々も、のこりをくなになりて

古様ニモトバナクキズ(ヒニ)

咲くかげ 歌五

咲き枝か高く

それさこそ

ものせるく見る人

古様いと五七五トナリ居歌ノ形ナリ

今様は歌を今様ノ一種ナリ

かなるの山々、かすみ渡きるさまもいとさびし。伴雄分過ぎてかへり見をれば根來山又そのこのげけもこのしかり者ア」。さらは心とまりて、足もをゝまば。諸平　根來山花ハかをみとるりふけりるゞ穂づゝみの春けもふぐれ。

第七　四季の月は今様　石川依平

うめさく園は　かをみつゝ、峯のさくらの　花ぐもり、くもりもはてぬ　朧　夜　の、月こそ春乃　ひのりなれ」まだしきをどの　ほとぎす、初音まろ夜は　手まくらに、なれてをゞしき　月のげは、閨の戸さゝで　明すなり」。桐の葉とけふ　影見えて、秋とほのめく　ふべより、

ゐち待ち居待ち　まちとりて、いく夜の月を　詠めけむ。

木の葉降りまく　山の端れ、時雨ま墨り。　霜まさえ、

雪ふてりそふ　月のげを、　などをさまでと　思ふべき。

第八　大倭詞　　大國隆正

いま俗ま、やまとこやばと云ふ、一くさのことばつのひ

ありて、それを御所方まて、つのひ給ふことばといふめ。

り。大和詞大成といふふこさへあり。この詞けことのも

とを考ふるま、桓武天皇の御世ま、今のたひらのみやこ

ま、都うつしありしそのまへの京を、大和の奈良ふてあ

ア一のむ、今の京ま遷りたまひてのちも、御所方まて、猶、

大和のことむを用ひたまひけむ。山城、國の民ども、それ

四段

大和都ム是以前
平安ノ都以後
鎌倉府以後
長流以後

をきゝて、大和詞といひたアしなごり、後々までもつた

もりて、御所方まて云ひたまふことばをバ、たゞ大和詞

といふ事ぞと心えて、その大和のふる詞ま、あとなくな

りたる今の世も、猶大和詞といふふるべく思もるゝふ

り。今の世まで、まことのやまとことばを傳へさるもの

ま、萬葉集まふむありける。そも〳〵、上つ世よりけ歌け

うつりかもりを考ふるま、大よそ四段にわのれてゐむ

ある。やまとま京ありしほどの歌を、ことばづつひ大か

たひとしく、今の京に、都うつしありてより後のうたハ、

そのさまいさくたゞひたり。鎌倉に府たちたりしより

後、又うたのさはたがひさり。長流契冲、難波まおこり、眞

淵翁江戸ふいでて、ふることまゐびをたてられしより、歌のさま又たゞひたり。たのき物さだめの博士まゐりて、この四段のうつりかはりをことゞるべし。やまとに京ありしかどの歌も、ことむづのひもをゝしく、さばかりことえりせずして、思ふまゝを述べたるものゐりいまの京とゐりてもいはさくことえりをして、たけ高くつくろひたてゝ、うるはしくよみたるものゐり。大和ぶりも武く、いまのみやこぶりも、あやゐりて、どりゞゝまめてたし。猶云をゞ、やまとぶりまて、うるをしくとゝのひ、都ぶりまて、をゝしきこゝろぞへを加へたらむまゝ、いづれも疵なき玉なるべし。されバ萬葉集の中まても、こ

八代集
古今和歌集
後撰拾遺集
後拾遺集
金葉集
詞花集
新古今集
新勅撰集
古今体
草菴集

とむをえらび、ならべをゝのへてよめりとみゆるを、をぐれてめでとく、八代集の中まても、たけきこゝろぞへあるを、こよゐくめでたきゐり。本居翁の、古體、今體ふたうさまわけて、ことばづゝひいりまゝらぬやうまと、をゝへられたるを、もゐの世のけてうごくべのらぬ正き教なり。唐土の詩人、古體、今體をわけて作るも、おのづからかなへる、ことむの道のもぢゐりけり。されど草菴集を好まれたるをことゐのず。新勅撰より後のうたハ、ならべつまりつたけひくし。頼朝卿總追捕使とゐり、て、大名小名をゐたゞへ給へりしも、世のさまのあらたまる時まて、歌のさまも、この頃よりかゝりしハあやし

き事あり。唐土の詩も、代の變るたびに、その風かはれるを見れば、ことぶの道は、あやしく世につるゝものなれ。むありける。かの頼朝卿、實朝公、うちつゞきて歌を好まれ、實朝公も、ことに萬葉集のふるきをぶたをうつされたり。その後うたのさま、ふたたかさまわかれて、京にても、基俊朝臣の二條流を執し、鎌倉にても、實朝公の萬葉風をこのむ人多のりしあり。爲相卿も鎌倉に下りて、鎌倉の恩をよろこばれしに人あれば、おのづから鎌倉の萬葉風をこのまれしなり。これより、二條、冷泉の二流をたちたるなり。その實朝公以後行をれし、鎌倉の萬葉風は、まことの萬葉風にあらず。顯輔朝臣、基俊朝臣の六條、二條

新勅撰
後堀川天皇ノ貞永元年ニ奏上
撰者ハ定家卿
新古今集ヨリ二十七年目

極政大臣ニ公ニ云フ
基俊ノ人ノ敬称
崇徳帝ノ時ノ人 賀永四年僧ニナリシ

の流義あらそひに、歌のみちは衰ふるにぞめまして、爲氏卿、爲相卿の、二條、冷泉のいどみあひに、此の道はひぢみなく基にあむありける。さて後は大ぶの同じさまにて、その間に、上手なのりしをあらねど、なほ調をひくのりけり。眞淵翁いでられてより、世の中は歌のさまに、はなはだくこそかはりたれ。うたのさまを、古にひきかへされたるいさをは、此の翁、契沖律師にまさりてるむありける。この翁は時は、かさよりたること多くて、今を用ひがさき事おほれど、よみ歌に、いよ〳〵へふもまれるる上手にて、ちらべ高く、千引の石はうごかすとも、動しがたきいきほひあり。ちのまれなる上手にてありけれど

公ハ五大臣
卿官ニ三極ニ上ル
爲氏ニ藤原
爲教 爲右家
爲相 爲顕
爲氏ノ庶子ニシテ
爲行ニ良カラズ
爲相ハ阿仏尼ノ
子ニシテ爲氏ノ嫡子ニ
爲氏ノ財ヲ奪フ
阿仏尼ノ陳情ニ下ル
花セシモノハ即チ未
ダ十六歳ノ日記ナリ

僧名ノ注ハ
(一)僧正ニ僧都
(三)律師

こそ、かう世のなうれうたのさまハうつされたんなれ。
さてのち八、千蔭、蘆庵こそ、一つゞひの上手よてハあり
けき。されぞまことのやまとことばハ、萬葉集よて、古今
集む今のみやこぶりのはゞめなれぞ、このふたつの集
を常ゑ手ならして、古體をよまむとてた、萬葉集よるら
ひ、今體をよまむとてた、古今集をまあぶべきなり。後撰
拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、かるらず見るべし。さ
すゞに新古今までた、雅調を失ゐむざりしゐり。雅語、俗
語をわうつた、歌まなびをる人の先つとむべき事よて、
まさ雅調、俗調をもわうちて、俗調よるらぬやうよ心が
くべし。そのうたを誦それバ、その時ハ景、前ようゞひ、そ

の歌をきけぞ、そのときの情、きく人の心よとほるばか
りある歌を、よきうたと定めて、古歌をぞ見るべきあり。
及ぞぬまでも、みづゝらも、志のよはむとこゝろがくべ
し。みづゝらあやしき流義をつくりて、世の人を、その垣
の内よ逐入まむとをる歌よみた、あぢきあし。又萬葉集
八代集をよくもよはで、人のうたれよしあしをいひ定
むる人もあぢきなし。

第九　寄附帳のむしがき　大國隆正

うつのや村ある石川忠左衛門の家よ、豐國大神のめ
たまへる道腹と、東照大神より賜へる茶椀とをもてり。
いと〳〵たふとき君達のめしたまへるもの、手ならし

給へるものを、いやしき民の、常まおきふしする所まむく事を、今はあるじかしこく思ひ(思ヒノ字月ヲ)まうけ(送リテオハコロ)れるころ、中島平四郎ぬしきたりて見て、おなじ心まいひたまひて、ぬりごめ(土蔵)つくりて、それまをさめおきたらむまハ、火のまざむひをさけむまも、たよりとこのるべし。志のたあれど、その(土蔵)の塗籠(家ノ内ノモノ)たつるに、宇都の山まといとをくあき、みちのく(五葉ヲ山)山のもの(黄金)、あらでをありがさのらむ。此の道とほり給ふ國の君(陸奥ノ山ノ名ハ大名)だちをむじめ、志もぐ〳〵のもれまも心ざしありて、たすけむと思ふ人よりハ、かのみちのく山のこがね(黄金)の花、いさゝかまてもめぐまれたらむまハ、ちりひぢ(元)もつもりてむ山とふるごとく、いくばくもなく此のぬ

まごめをいでくべし。助けなす人の名を志るをべきとぢふみを(帳面)、おのれつくりて得させむとて、作りあたへらきしをひさしくを志ぎする人のなくて、其のまゝにうちおきたりけり。隆正この山をすぐるとて、此の家に立ちより、その志なぐ〳〵をこひ見つるまま、家あるじいのまよしてのわぎ人なみ〳〵まま筆とりて、もめ志るすことを知りけむ。此のをしぎ、一くぐり書きて給へとこふ。今まぎをむをりまのくにまを、いなみの原もあれど、こと言のまく〳〵此やしろとほのらねバ、あるじのいふまま(遠刻ハ望郡小荘中山ノ事ニ佐神社ニ従ヒ出ラフ)まのせて、そのよしを、つたかへでのは、つゞふき言葉をもてかき志るするり。こゝろざしあらむ人ハ、ぬりごめ(幡ノ印南郡ハ南村ニアリ)(遠江ノ国南神社ニアリ)(特遠江ノ国ノ神社ト称ス)

のつち、一あぶの毛一ひら、木竹一本のあさひよても、助けたまへと、おのれさへたのみまゐらす。

第十　浪華の嵐

依田百川

元亀天正のみぎれよりこの方、世のそぐれ男も數あれども、學の道ハ夢まだにゐどらば。唯ひたぶるに、弓ひき、太刀拔く事をのこ志つゝ、首きり城をとるをもて、こよなき功とし、唯世の治りて、己がわざのけちうせむことをのみぞ嘆く。されど關原の事あり、東の大臣の勢猛にして、世まだ〜かひなどいふ事聞えずなりしのち、かのもざ等も、うき事に思ひ、いのよもして、世にいさめる事あれども。久く志びれしかひなをのむし、さびたる鎗をも磨き、目おどろのすなどの功名せむと、志のびまの人々ぞ、東の方に中あーうなりて、さまぎのゝ志ると聞き、或ハ法の衣にかくれさるもの、或ハ深き山中に身を志のび〜人々、時こそ來つれと喜びて、こゝかしこよりかの城さしておもむきぬ。

亮ケ

かの修理亮も、淀の君に云ひけるやう、はや御旗を擧げさせ給へ。この頃關東よて、諸國の受領どもに仰せて、城築のせ、殿づくりせさする事、あまさたびに及び、世の人これに苦む。いのて世の亂もあれかしと、いひのゝしるもの多く、まさ西の國々のぬーども、故殿の御恩かふゞ

りし事も少からず。さるものも、吾が君の御旗を見て、い
つで參集らざらむとぞ、め申す。右大臣も唯何事も母
君の仰よそむき給もず。その御心よ從ひて、つもものど
もを召す。故關白の御庫よ、深くひめて積みおこせ給ひ
し、黄金の馬どもとり出で、そを竹の鑄ぎさといふもの
よして、ものどもよ給をす。そを多くえて身よ德つけむ
とぞる、例のえせもざつどひ來るよぞ、その數を、わづか
十日ばかりよて、五萬餘人とぞ志るしぬる。
右大臣も、文作りて、國々の名あるぬしを召しけれども、
もや遷りかもる世のからひ、昔の名殘を慕ふもの少く、
さしも賴みたまひし、加賀國のぬしさへ、右大臣ば文を
封だよ開ずず、これを關東にまゐらせよき。御使もから
き目みてのがれのへりぬ。修理亮も、思よ違ひて、あきれ
よ思きれしのど、さりとてやむべきよあらねば、いつも
りて、いづれも、故殿の御恩を思ひて、吾が君よ從ひまゐる
らもるよしかへり言あり。東の軍寄來ふむよも、前とう
しろとより、はさみ擊よこそせんずらめといさめけり。
かくて、かさきを防ぎむと、心構どもするに、北の方も、城
の外よ淀川の流を帶び、長柄、神島の二の島よ、まもりの
つも者をもく。東ば大和、木津二つの川あり。鵜野、今福よ
り南の方、鷺島まで深田よ向ひて、かりの城を作る。西も
横堀より、川場、博勞淵、あし島、初島、ゑとりが崎、道頓堀ま

でいかめしきとり手を築ませ給ふ。鼓の音ハ、海山まひびきて、山びこも聲をとゞめ、矛太刀の光まて、天飛ぶ鳥も翅をとゞめて、雲より落ちぬべし。

左衛門尉信仍（ヨリ）といひしを、安房守昌幸の季ハ弟まして、才智人まこえたりしゞ、東の大臣ゞ、故關白の仰に違ふふし多きを、世まこころよからず思ひしかバ、關原の事起りしときも、いちはやく大坂方ままるりぬ。されバ事平ぎしのち、所領を失ひて山ごもりしてありしが、今度右大臣に深くたのまれ奉りて、生死をともませむといふ家の子等と、城ままるりて、關東のいくさ、日あらずしてよせ來む由、うけたまはるまに、いたづらまるあゞらこれを

待つむよき謀ともたゞえ候ハず。（北國方ノ兵ども）北國の兵どもいまゞ參らずときく。この時をもて、御旗を天王寺まもてめらき、森勝永と信仍御さゝをつゝうまつるべし。かくて山崎まむゝひ、長曾我部もり親、後藤の基つぎむ、大和路まいで、宇治のはしをきりたち、伏見城を攻めおとし、みやこまに火を放ちてのゝしり騒ゞむ、西の國の人々、大方ハ馳せまるり候ひかむと申す。されど大坂の城む、天ゞ下にならび無き城なり。こゝまこもりるて、防きたゝゞふこと、二とせ三とせならむにも、たゞのづうら人の心動きて、かしこまも君まに從ひまるらせむとをるもけありかむ。さるをかろびさる振舞してやぶれたらむまハ、唯ひ

とゝきに亡びうせぬべしと、止めまつる者ありしのバ、さもありぬむとて、左衛門尉のはゝのりごとをもちひ給ず。東のいくさ國々よりつどひ来て、そのかず五十萬とぞ聞えし。かくて時関といふことをつくろ山も崩るゝむかりまいとおそろし。城よりも、かずのつはもの出で、こゝかしこにて戰をなす。されど、させる勝負もなくて、日をおくりぬ。東の大臣、例の深くおもひはかる事おもしまして、御使を城中にたまへり。いので爭ひたけぶ事をやめて、もとのごと睦うかたらもばや。もしさあらむまた、めぐりの溝掘をうづみて、再戰をなさゞの志るしとて給ふゝ。或もこの城を出でて、大和國の郡山にうつ

堀

ア給ふべしと仰せさす。大坂關東、御和睦の事、初の程ハ、此處よも彼處よも、さまざまのことぐさもありしのど、終ふをなごみて、かのめくりけ溝掘を埋むる事ともありぬ。誰も〳〵この度ハ和睦、とても久くもいのゞと思ふべのめれど、あからさまふうち出していふものもおし。關東のかけ正信男も、おそろしきものよて、大臣よ重く用ゐられしのゞ、此度の事、萬、執しまをすやうよもそれども、中々にあしき心もて、大坂方の人々をあなづりかろめ、かけ掘うづみの事ゞ、初のほども遠き方のみありしを、めぐりとふらむのぎりも、皆殘るところあくせよと、のゝ志めして、さ

しも深く掘りめくらしたるを、今ハ幼きものといふとも、たやすく出入をるむかりまーてけり。さるも彼の男の心ひとつよ出でしふや。

第十一　木村重成　依田百川

年立歸りて、む月の天うらゝかなれど、人の心ハ静ならず。西東和睦の事も有りつれども、浪花の御城よ集へたまひける武士等も、わぞ志ろどころも無けまで、いつ地をさーてかへるべき。さりとて、餓死て死ぬべきよもあらず。東の大臣ハ、さるものゝふらを、扶持すべたふあらずとて、一粒の米だよたまふ事あけれむ、大坂の右大臣もこうゞてかよのくと仰せたまへども、きゝも入れたまはず。されむをべて天ぞ下のみだれハ、人の心平のあらぬより生ずる習なれバ、それ心平ぐべきわどの事なからまーかむ、いあでえやむ止むべき。つはものどもハ忍びあへず。こぞの戰をさせる事ハ無りーのど、天下の兵、のこりおく集ひて侍りしよ、此の御城をかし奉るよ及でぞ。さるも、故殿の御れきての、きびーくゝのほりたるぞ故あり。今年をえ過さず、再、戰起させ給ひなむよも、國々のもはども、まねのずして從ひまつるべーと、そのかーゝ申ーゝあば、右大臣も、淀の君も、さをぞよいあ。びあへ給はず。さらバ、つもものの召せとて召さをるよ、たびも、去年よもまーて十二萬餘人とぞ志るーき。

されども、此の御城よ集來つるものどもも、大方一所不
住のもけいふのみよて、君に眞心をもて仕へまつるも
のも、一人二人よもぎず。唯こゝよ一人のまめ人ありけ
り。長門守重成とぞいふなる。この人も常陸介重茲の子
よて、いと幼きより、右大臣の御もとに人とありて、親く
仕へまつりけり。太刀打つわざハ、家のをぢなれどいふ
よしもたらず。心ざまもうふして、志も正しく、世よま
れなるべきをぐれ男なりき。去年和睦の御使として、茶
臼山ふまゐりしに、つむものあまさ打圍こ、だどろ〳〵
しきさはるりけるを、守むたのよ見やりて、志づのふ
仰言をきけり。あないみどと、つむものらも目を驚しき。

大臣なか常陸の子よや。面影のよう似たりな。年もいく
つぞ。廿を二つこして侍り。さらむ、右大臣とれあゞ年に
こそ。いぬる鵜野の戰、目醒むる心地ぞする。いな思ふほ
どふも侍らずと答奉る。やゝありて誓文をたまをる。守
むこれをみて、殿の母君、なあありやうぞり給へむ、これよ
て御判をたまむらばやと乞申す。大臣もせむすべあく、
御みづからおよびの血をものしてたびけきむ、やゞて
まかでよけり。
大臣、この人えうあるものなり。召仕むゞやと、伊賀守勝
重よ仰せて東よ參出よ。知るところあまさとらせんず
汝ゞおやた、我と親う物せしまとありしゝど、守ハ故殿

の御恩、海山よりまして、こそ候へ。今ものきはの御あい
ごんを、いのでおろそかやつのふまつるべき。仰せ、い
とかたじけなくも侍れどもとのゝ聞えて、從ひまつら、
ず。かくてこたび、御和睦やぶれしうむ、おもひけるやう、
君ハ、修理亮などやうの申すむねを信ぜさせ給ひ、輕び
たる御振舞おもしませバ、今もむげに頼みをくあし。唯
いのち一つをもて、ま心をあらはすの外もあらずとて、
五月五日の戰に、かの後藤又兵衛といふ者、はやく失せ
れぬ。つゞきて、長門守も手痛くふるまひて、首を授けな
り。明る日、左衛門尉信仍、茶臼山の戰ふうたれき。名ある
人々、いづれもく、夕の露とともに消えぬるぞ、いと惜
き。

第十二　海ゆかば　　木村正辭

海ゆかば　水づく屍、山ゆかば　草むすかばね、
大君の　へにこそ死なめと、言立てゝ、仕へまつりし、
いふしへの　はしきやし　こゝだ貴し。
まさらをを　かくぞあるべき。今の世の　増荒猛夫も、
事しあらば　命惜まず、敷島は　やまと心を、
劔太刀　いよゝ磨きて、後の世に　語りつぐべく、
名をし立つべし。

第十三　對鷗亭記　　近藤芳樹

こさとのうち、いづくもあれど、野の望とかぢろく、水の

なごめ給へ。わびのなるに、淺草の橋場わさりよ、まされる
處あらずあむ。こゝにおほきたゐいまうちぎみの、をう
をう通せ給ふ殿あり。對鷗亭とあむいふ。此の殿はお、
むしまより近く見れば、花をのせてくぐす筏は、霞の水
脈をわけ、月をくだきてのぼる船の、こがねの波ようう
べるも、たゞみ園の内より引きて流せる川のとおもはれ、
どかく見れば、筑波山のみどりはるのよ聳えて、まとあ
なる旭のさとよ、御代のめぐみのおけきを志めし、不二
は雪高くつもりて晴行く空の上よ見え、いつくしみの
深きをあらはせるも、まさ御園は外ふ造りて立てたる
山よやと思ふまで、どかはぐきりろくなるわびのなる所なるを

業平朝臣の歌ハ名よしおもゝゆきこと、もむ都鳥わゞの思ふ人ハありやなしやといへるなり

その殿の名を、のく鳥もてつけさせ給へるも、いのよと
いふよ、むのし在原業平朝臣の、波のうへよちひさき鳥
の遊べるを見て、いざこと、むむ都鳥とよまれしゞや
がてこゝまで、その都鳥もかもめの又の名ふしあれば、
思ひよせ給へるなるべし。さるに業平朝臣の渡らきし
頃ハ、廣き野の草むらの中なゞきし川よて、都鳥などみ
やびたる名よゞれけむも、ふさもしからぬこゝちする
を、かくみさのりの御代よ當りて、おほいまうちきみこ
とに事とり行もせ給ひ、都うつしせさを給ひしより、い
とゞよぎび足へることさゝなれるを思へむ、はやく千
歳のいふしへよ、都となりなむ兆もありけむのし。む

かし誰のくありぬべき世を知りて鳥よみやこの名を
おふせけむ」とおのれぞよめるも、この心を思ひてなり
けり。かれ不二よりも、つく波よりも、花よりも、月よりも、
このちひさ紀鳥を愛でおぼしてかく屋の名よもつけ
させ給ひけむこそ。あなおつこしの鳥の名や。はなおむ
このしの殿の名や。

第十四　彰考別館の記　安藤為章

あぶ君、封域のまつりごとよ、御心をもちひ給ひて、仁刑
はやまちたはもすば、士にむらいなるふるまひなく、民
ふ横しまなるうたへを聞あずして、おのづから、筑波山
の風も枝をならさず、那珂湊、なみちづのふる御いとま

よ、武備文事、ふるきあとをたさひおこさせ給ふなるよ、
本朝の史傳くたしからずして、古人の履歴かくれうづ
もれぬるをうれたしみたまひ、小石川の藩邸よ彰考館
といふをたてゝ、四方の儒生をめしあつめ、神武帝より、
始めて、後小松院よいたるまで、本紀列傳をえらびたま
ふゞ、なかもしきやふるき大宮の公事ども、年々よをそ
たりもてゆくを、ほいおうおぶしてかの鍬羊よも比ひ
ねのしとて、舊記のうち、四方拜より、追儺よいたるまで
れ恒例と、御踐阼より、國忌薨奏の臨時を類聚せさせた
まふ。そのところを彰考別館と號けて、水戸城内よかま
へらきたり。總裁よハ前、右兵衛尉藤原為實をまねのせ

本紀列傳　天皇陛下ノ御事ヲ記シタル書
列傳　將軍大臣ノ事ヲ記ス
歌人傳　皇族ノ歌人ヲ記ス
公事　朝廷ノ儀式
追儺　毎年正月ニ行フ鬼ヤラヒ

給ひて、貞享丙寅の秋より編纂をはじめらる。參館のともがら、總裁一人、考勘十五人、書寫二十八人、校合十人出納四人、檢察三人、隔日ゑ辰の半漏ゑはみりて、未の半刻よりぞく。たゞし、書體を仙洞へ奏覽し、且ハ群卿の批評をうけたまはらむ為ゑ、四方拜、御藥、朝賀、三節會、朝覲、行幸、二宮大饗などを類聚して、今出川の内府ゑ、たのみきこえさせたまふ。君候もとより武林ゑ生れさせ給へむ、有職の道ゑハ、うと〳〵しくなでう事のあらむと、搢紳家のどもがら、おもひけち給ふめるに、九例ゑかゝせたまふごとく、ゐさゝゐのも、御私の才學をまゞへらきず、たゞ舊記のまゝにはかせて、公事一切を、首尾こゝのへて採摘し、部類たゞふことあく、編集せられたれむ、こなた感賞してのたまはく。あをき、朝廷さのうなる世なりせむ、勅撰の書ならましを、いつしの公武地をかへて、かうやうのくをぐてを、あづまけ與ゑて、思ひたちゐまふことよおどそゞろゑ涙、催されしかゝぐもおをしけりとそ。仙洞厳感淺のらずして、禮儀類典と題號をたまをり、かつ書目ゑもれたる、撰集、秘記、新儀式、後伏見院御記、深心院關白記おど、借しくだされ、まゝ官庫ゑ見えざる記録をめし借らせ給ふ。おゝよそかくのごとき秘書珍記を、この一館ゑあつめさせ給へるを、かの史傳のおゝ立ちより事おこりて、京師田舍ゑたよりをもとめ、名

山靈區のおくまでを、あまねくさぐり尋ねて、こゝらの年をへてこそ、むかきにみち、牛もあせにもるばかりなむなりぬる。爲章、むかし都のうちよそだちよたれど、かうやうなあまたの舊記を見聞く事もあらざりしを、今ハ日ごとにふるき代々の事どもを、まのあたりよ熟覽すかる幸のいたりも、身よおもをずぞおぼえける。古の人をよろこぶ事あれど、かならず志るすとゝのふ事をおもひいでゝ、ゆさゝのこれをかきつく。

第十五　廣島國學院開院を　小中村清矩

我ゞ大皇國よ生れたらむ人も、あだし學よ先ちて、わが國柄と、古よりの事實とを明むべきてとりハ、更よ言

擧すべくもあらず。然るよ中世よりこふた、專漢籍を讀むのみを學問と思ひなして、もめらざの天つ日繼の、天地と共よ限かくましはす緣由をも、此の大皇國て、いのふして成立ちいのまして代々を經ぬる事ぞとも、辨へずある姿とかりきつるをうれたみて、德川幕府の盛かる頃よあたり、荷田、加茂、本居、平田の大人たちの言を立て、書を著して、世の人を諭されつるて、漢籍心なる人たちよ向ひて、いとゆる反動の力を用ひられたる所業よして、殊更よ我ゞ國の古を尋ぬるを、國學といへる名稱も、こゝよ起れり。されど、夫より大方の世れ人の心よも、我ゞ國ふ生れたらむよハ、勤王といふ大義を守らでて、

えあるまゝき由を知りて、遂ゐ大政復古の明治の大御代となりぬるも、人のよく知る所なり。」さて萬の御政事を、西の國ぶりに倣ひ給ふ、大御業の始りしより、西洋の書を學ぶをもて、勉むべき所業とし、これをもて智をひらき、身を立てむと思ふも、ひしおべての世の風となりぬれば、志ある者も、おのづからわが國の事實を尋ぬる暇なくて過ぎぬるを、此の四とせ五とせ、ぞのりこゝたゞ帝國大學の文科を始めて、官私立の學校ゐつきて、國史、國語の學を習ふ輩の年ごとゐ多く、又世の中ゐ歴史、國文學の便とゐるべき書ども繁く顯れぬるも、これまた西洋の盛なり。反動ゐ、且も此の年頃、どつ國人の、我が國のふる事どもを問へる時、答へむすべを知らざりしを恥ぢ、或も外國人のなの〳〵ゐ我が國語ゐ精きもあるゐ驚きたる類よりして、漸くかゝる世のさまに移れるものゝらむと思へば、外交の刺衝も交れるあり。」かゝる時を時として、いゝ年、皇典講究所長山田伯の思ひはのりもて、始めて東京ゐ國學院を立てられ、此の學を專とすべき學生を集められしより、はやう四とせゐ及びたりしのぞ、各研鑽のつとめを重ねて、國體を明むる筋ハ云ふも更なり、歴史、法制をも深く心ゐ入れ、文法、語格をよく辨へ、後進の道を導ぶ者もゐるらむ輩の、繼ぎて起るべきさまいちぢるし。こゝゐ安藝の廣島

明治廿六年三月
廿八日ふり

なる藤井稜威ぬしの、あまた年、いたづのれ（いさを空からず、こたび國學院の設ありて、學科たゞしく備り、教員その人ゐ乏からず。此の月、開院式の盛舉ありと告げこされしうだ、かゝる時よかゐひて、益、此の道の、み盛まからむ事を歡びうれし（み）つゝ、遥よ拙き言の葉を贈りて、此の説のとこしなへよ立榮え、この道よ勝れたる人人の、次々よ出來ゐむ事を言ほきまつるふこそ。ゆもそも國學の盛よふり行くも、此の大皇國の人もろ〳〵の、大和心ふり起すべき基ふれば、これ學の榮ゆるも、をなむち國の榮ゆるなり。此の學け行れざるも、やがて國の衰ふる志るしゐらましと思へむ、此の學け盛衰よも、心

あらむ人の、深く考ふべきわざぞと思ふまゝを、今このほき言の末つのさゐ、いさゝの書きそふるよゐむ。

第十六　大鏡をよみて　小中村清矩

大かゞみを、そのかみの實録ふして、いとめでたき書ゐり。さるはおかやけの大御アぎを更ゐり。上下の事どもをさだのよ志るして、後の世までの寶ともゆるべき御史を、早うおほせ事ありて、つくらせ給ふ儀のをたれふしのば、延喜よりこなさい、たゞ人々のアたくしものとして、あるを漢籍のをゞたふより、あるを皇國のことばゐゞらに、おのゞ志しかきつくる事よぞなれりける。そをあらざまるを、今の世よ多くつたをらねむ論せず。

かなぎなるも、なふくれとあれど、多くも、古今をそこ
なはとおく志どけふうものーさるぎの中は、此の書をも、
かーこきみのどのおほんうへより、皇后皇子だち、大い
まうち君だちの、御裔のをゑ〳〵まで、其の御心をへ御
志ゐざども、つゐうきたる事おく、こまやかは志るーた
るハ、ゆとめさむる心地ぞする。」さるもこのごろ、みのど
れ御ゆきちひの、やう〳〵おとろへ給ひぬるまいに、大
御政を、そべて藤原のあぎれ一をぢはおちきて、いと
あさましかりけるさまの多うる中に、冷泉のみのどの
東宮をさだめ給ひー時、實頼、師尹らの私はのうらひて、
世の人れおもふまもたぐひて、為平のみこを引きこー

音平親王
左大臣源ノ高明ノ御ムコ
円融天皇ノ守平親王ヨリ
実朝
伊勢ノ安子ト
兄弟ニテアラセ
守平ノ母ニ為ル
花山天皇
弘徽殿
御帳子
一條天皇ヲ早ク亡
シ即ち又トハ
円融天皇第ノ皇
子ニマシマシ時世ヲ
受ケ給ヒ中ニも
大政大臣ニ至平
第三子ナリ

て、又の御弟守平のこさを立てまゐらせたる、又花山の
みのどを、そのーおろーー奉り、小一條院をおろーまゐら
せて、御心より東宮をのかせまつりーやうの御事ハ、は
るかかる今の世よりおもひ奉りてだは、そぶろは涙ぐ
まれて、見るはえたへぬぞおし。あるもおのれれ殿づく
りを、清涼殿のさまふ志つらひたるハ、ゆふーへ蝦夷と
いふ、おごれる臣の志ゐざまも、あひつぐべく、おりゐの
みのどを、私のうらみによりて、射奉りさるも、馬子とい
ふきたゐき賊はも、たぐひつべくかむ。」はゝ兄弟のあも、
ひ、近きやのらのかどまて、勢をあらそひーも、めづらー
のらず。上達部かど、やごとなき人だちも、ゆと腹

あーきぞ仕りて、人のうらみをおひて、其の靈の、子孫よたゝれるるどゝふことさへ見えたり。おもふよ、いふーへの史どもよもなか〳〵よかうのゝしむやも」。さるを朝廷の命をうけて、つくれる史どもハ、天皇のおかんうへもさらなり。時の勢ある大臣よはゞこのりて、忌みも隠しもせし事のいと多けきぞ、うづもれて世よ志らぬ事の多のめり。されど、中つ世よりこなた、正き史どものなきを、博士だちのうちなげくめるも、さる事なれど、おのれむがゝるかな書どもの、今ハ世までのこり傳りて、其のをり〳〵ハさま、かくるゝくはなく、見えわされるぞうれしゝこそおぼゆれ。さて正き史のある世よても、私よ

むかうのきをさびぬる書どもハ、多くちりがひうせて、後の世よ残きるも少なうるべし。かゝれど、いふーへをふかく志のゞむ人は、つら〳〵ふよくあぢをふべきふみなりのゝし。

第十七　蓮を見る詞　加藤千蔭

大比えうつされたる上野、岡ハ麓、比良の大ゞぎあせる池水のなとりふ、さゞ波や志賀さゞれ浪もて名をおぼせさる屋あり。」白妙の不二の雪もきえ、あらかねの地さへぎくといふるころ、人みなそゞみせむとて、其のやどりよつどひて、高きやよのぼりて見渡せど、池のもてを、紅の色をだと見ゆるぞ、蓮の花さかりみちゝうるよ

てもありける。おひたてる葉のひろごりたるも、宮路も
くうまびとのきぬ笠の如く、うきたるも、大庭は百の つ
かさのそろうだ、きもらべさるごとく、葉ふおける露
も、白玉の五百つはどひを、ときみざしたるふるむ似た
りける。池の水清らはそみて、遊ぶいろくづ思ふ事ふげ
なり。」人々きぬの紐をときさけ、おばしまにようるて、酒
くみのそにわど、かの岡の木高のる瑞枝ふきこす風れ
をぐしきは、えるらぬ香れかをりくるも、たどしへなし
や。かるさの岸より中島まで長き堤をつきて、石もてつ
くれる橋かゝ渡せるハ、もろこしの、西れ湖とのいふめ
る處の、さまかけるのさま似かよひて、はるのに、行きか

ふ人の袖のにをひさへ、なつのしくさゆ。あるゞも、吾ゞ
國ぶりれ歌つくり、ふみ見る事をしも好めるゞうへは、
こと國のふみをさへは、あした夕べの友とおけきバ、さ
るかされ友垣はおもともしからず。唐詩このめる何ゞ
しれもの せハ、さにぬりの小舟はからをとめのせて、此
の花をらせまくおもひ、日の入る國のますらをの法は
心をよするも、是ぞこの上品れうてなふあれ出でたら
む心ちするあど、ゆひあへりけり。」人々心々に歌はよみ
出づきむ、たゞもあらばゞ、なべて世のはごりはそまで
住む人の友と見るべき花ぞこれ花。かくて上野、岡の入
相のかね、木のまおのぎてひゞきゆくされバ、みさゝりは

上品九品ノ内
九品ノ道且堂ヲ
ウ

ひらけたりし花の、又ふゝめるさまに立ちかへりたるも、あれふるゝるもれるらも、をち方の梢の鷺すら、ねぐらもとむるもれをとて、人々ゐれかへりぬ。

道ハ大道ヲト
路ハ小道ヲト

第十八　松下の泉を詠める　八田知紀

水無水ト云フ意
六月

みな月の　照る日のさかり、岩ぐねの　こぶしき道を、
坂路の　さかしき道を、あへぎつゝ　わぐ白く道の、
道のべれ　くぬ木の上ま、居る鳥の　志とゞまぬれて、
志ぐ羽を　ほせるを見れば、山の井れ　水のあみけむ。
その水は　いづくゆるらむ。其れ水を　我もくまむと、
たもとかり　求むるはしに、さつ人の　我まつぐらく、
かの見ゆる　たむけま立てる、松の木れ　その松ぐ根の、

岩ぐねま　出づる真清水、飽くばかり　手まくめども、
苔深み　露も濁らず、まことよき　其の真清水、
行きてくまさね。

第十九　音韻反切　清水濱臣

たよそ古言を解せむと心がくる者、たれの五十音の反切によらずして、釋しえられぬべき。さていへその反切まあづみて、志ひて語を解せむとすれば、あの〳〵誤る事おかし。縣居の翁ぬ、よくその意を得て、釋せられしを、その教をうけし輩、よろづの語、たゞ反切まありとのみ心得て、あしく心得たるも、五六言をつゞめて、一言とかし、志ひて古言を釋せむとする人あり。いみゞきひゞご

といふべし。翁の門人は中よて、狛宿禰諸成、建綾足か
ど、殊よ反切よなづみて牽強の語釋おほかりき。ある時
綾足、宇万伎ふ逢ひて、語りいへるやう、おのれ久く霧の
語釋を考へえざりしを、近頃發明せりといふ。宇万伎問
ひていはく。そもいうかる釋ぞ。綾足答へて、霧と陽炎と
同語ぞ。カギの約キなり。ロヒの約リなり。されぞカギ
ロヒの約キリよて、いづれも、天地の間は一氣なり。同語
よハあらざるやといふ。時よ宇万伎、微笑ゐて、やがてい
へらく、わぬしゞ霧の語釋ふよりて、おのれも發明せる
語釋あり。鷹と燕と同語なり。綾足、かたぶきて、いかで鷹
と燕と、同語なるべきといふよ、宇万伎、ツバの約タなり。

クラの約カなり。されバ、ツバクラの約タカなり。いづれ
もおほゝ鳥類なきバ、同語同物なることりなりと、あ
ざけりいふよ、綾足、こたふべき詞なくして、閉口せりと
ぞ。誠よよき答といふべし。霧と陽炎とも、共よ天地の氣
よてあれど、同語よやとおもひ疑ふまゞきよあらねど、
鷹と燕とも、いかで同語といもむ。共に鳥の名なるをも
て、答へたるも、當意速妙のこたへかり。

第二十　言葉のさだまり　本居春庭

もめら御國の言葉ハ、いとも〳〵あやしくゝそしくゝた
へなる事ハいふもさらよて、又その使ひざまるゞ、おの
づからさだまりありて、いと正く、いさいあもたおふ事

のふきも、いと〳〵くすしきわざにゐむありける。かゝれば、ものまなびせむともがらも、古め跡をよくかむがへ志るべきなり。

世々ふるく志げることの葉のかよひ路もあとふみ見てぞ思くべかりける。

（昔人ノ用ヰシアトヲ尋ネテ昔ノ人ノ使ヒザリシ所作ミキ樣ニ使稼ヲスマキ跡ハナリ）

さて今は人を、詞の意をとゝのくいふめれど、其のつゐひざまをいゐよともいへる事なし。詞の意を志らむよりハ、その使ひざまをよくしきまふべきことなり。意を志らむはやもく、つゐひざまを心得むもかたく、又ふみのき歌よはむよも、たとひ詞の心をよく知らずとも、用ひざまを心えゐたらむは、いさゝゐも用ひあやまる事ハなかるべきを、詞の意をのみ心得居ても、其の用ひざまを志らざる時

（治用音韻反切）

て、おのづから誤も多ゐるべし。されば、とかく古の例を志りあきらむべきわざなりけり。

（考証別）

世の中ま天地をもじめ、ありとあらゆる千よろづの物、いづれゐあやしからずくもしからざりける。中よも人のもれゐひて、言靈のさちをふ國、ことだまのゐすくる國と、昔よりいひつぎ來て、皇國を殊ま萬の國にもぐれて、其のさまいと正く、清らゐるる事ハさらまもいてず。萬のさまをかさるふ、いさゝかの差別をもくはしく、こまゐにいひくるるなど、又歌を殊ま思ふさまを述ぶるものなれば、其の詞ゐつゐひざま、てふをはの用ひざまによりて、意味ゐ深きさま、心ゐへなどをもあらもし、又たゞ

（言ヒ靈ヲ妙ナル能力アリト尊ブ事ハ寺務ノ与ヘ何ハ足ラリ云ヒ改ヒ大ニ古ヒ自ハ為ノ場ノ外ヘ用ヰ物ノ如ク）

一文字の用ひざまによりて、意のいたくことかる事など、又其のつゞけざま、いひざまふよりて、言はいでていなぬ意味をも、おのづからあらしめなど、をべていとく、をしともくをしく、ゐとく〳〵たへるるゆゑになむありける。さて其の詞れそらきてふをはなど、神代よりれのづからのさだまりあゆて、いさゝのも是はさぶふ時も、其のことゆゑらず、聞えぬ事となるなり。其のさだまりの意を、ふのきゆあよ、さるべきことゆり、ある事あるべけきど、人のつたなき心もて、はのり知るべき事ならねバたゞ其の定れさまを、よく考へゆきまへ置くべき事あり。をべて詞の意をあがちま考へきらむより

も、そのつかひざまてふをもの定をゆきまへきりて物せバ、ゐさゝかもたゞふ事かく、誤る事かのるべし。そハ、今のかべての人れ物いひ、さとび言はも詞の使ひざまてふをもかど、自其の定ありて、一つも違ふことなく、詞の意いのはとも志らぬ人も、其のいひざまてふをもの定、自よく辨へたれバ、ことをいひゆのつは、聊もあやまりたゞふ事かきはてもも知るべし。されバ丈かき、歌はまむともがらも、此のいふしへよりの定のさまを、よく考へゆきまへむ事を、むねとはをべきゆゑざにかむ有りける。こゞひ其の定のさまゞ多のるなかは、一つ二つ思ひよれることのあれバ、書ききろしつ。かほ思寄らむま

にまふかきつくべきさかり。

第二十一　西行法師

上田秋成

文治それの年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居にまうでさせ給ふ。例の事よて、御供仕うまつる人々、みさをおひ、御あとべつのう奉まる、渚よ遊ぶあしたづけあゆみして、どからずつらを亂さじ、ねり出でさせ給へるを、大路よ膝折りふせかしこみたいまつる人數ふべうもなくあまさあるよ、けいめいしてあるとぞよいたせず。世よいうめしく貴き、おほんありさまかり。かへりまうしたて、御手輿よめさせ給ふなど、さとき御まかどりよ見留めさせ給ひ、御階の忌垣のもとに、

文治　後鳥羽天皇ノ年号

かしこまりをる法師のあるるぞ、見上げ奉るつらをき、旅よ飢ゑてゐと痩せ、黒みづきゐるよ、衣杖笠などもかたゐものゝさまーさるぞ、目をぬをみてうずくまりをるなか人よあらずとおぼしけむ。あれ法師ぞ修行をるやう、名をも問へとおほせたうぶ。御輿ぞひの若侍、急走りよりて、ありがさく御目たまへり。いづくよりの修行ぞ。名をも申せよといふ。ゆくりなきよ驚きざはして、雲水よありの定めず侍る者よて、名も圓位と申すといふ。聞召されて、をれぞこを聞知りされ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人えたるゐめしよ誘ひかへらむ。我ぞあとよつきて來れといへとて、召連れさせ給へり。

御館よいらせられ、御裝束改めさせ給へで、やがておほとなぶらあまさ照しかがやけゐり。今日の道中よありし法師まるれとて、おまし近き所の一間なるそのこに召さきさり。大將殿見おこせ給ひて、昔むこやの山け御宮づうへせ一人、世をはのなきものよ思成して、身て黒くやつしされど、月花のなげきのほまれハ、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。文字の數ぶ歌とのみ思ひしも、かうさ一向ひてて、武士れまけド心もあらずなりぬるぞ。八百日行く濱の眞砂の中よて、玉とて拾ひをさめあらむを、語りきこもべくぞおかせ給ふ。いみどう畏りて、思懸けず、大樹の御蔭ふまゐり侍れで、れともかがや

うーきよぞ、あゞ夢路をたどるやうよ侍りて、聞えまつるべき事も、侍らず。さと矩御まかこに見顯され侍るて、そゝと〳〵ありがあく侍れ。伊勢の海千廣の濱よたりたつあらひ侍れど、かひあることも打出で侍らぬよて、これとて捧げまつるべくもあらず。君よもかねて學でせ給ふとも、洩聞きたてまつき。天の下まつりごち給ふ御うつもものゝ、れかいやうなるよおぼしよらせ給ふよて、かけしも及ぶまゞきをさへ、思ひ志り侍るよあむ。大空よ羽うちつけて飛ぶ田鶴の聲、霜枯の淺茅ぞもとの虫の音、いかで取りなめて聞もべき。あなかーこと申す。打ちちづませ給ひて、弓とる人のもとれ心の武き

よは、よむ歌も直くあうらさまと聞くを誠よの。歌を武士の荒々しき心よは、讀みうつしうまびきものよ、宮人達をさだし給へりとや。軍よ出立ちて、笛つゞみの音、馬のいかゝきを、物とも思をぬを、この三十あまりは學よは、心のおくるゝはいのふぞや。」こゝ畏き御心よも、おがし惑をせ給ふものの。古の代々の帝を、馬よ鞍おき、弓矢とらして、軍よたゝせ給ひし、其はおかんをよみ見舉ぐきバ、武く直々しく、志らべもいと高しとこそ打聞き侍れ。いので歌よよむとても、益荒雄心を取隱し、あてよかよびうゝ、讀てうつすべくもろこそ、此の道はいみびき煩おれ。君ぞ御心の敏くたけきまゝよ、うちまねびせ給

安房山雲行庵ノ旧跡
鳥帽子岩ヨリ東南五里半山ノ姿同ジテ傳延年間僧円住隠棲セシ所ナリ

煩　苦タグナリ

もむよを、今の世は人、誰のを立ちあへ奉らむ。三尺の劔をとりて、大風起り、雲飛揚すとうさひ、槊を横たへて、烏鵲南すと咏ぜし君たちを、鞍の上よて文よ遊むせ給ふならずや。玉造らぬいみびきをもりみぬき、漆殿のやしほの色も、はのかき目うつりばのりを何よかを。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒のあゐみ、いづれの道いづれの業よも始より勝れたらむを、鬼よこそ待らめと云ふ。

ひとゞあれ聞きゐまへ。世を捨てのぬれたきど、ゐのもしきの心からずや。汝ぞ遠つ祖は秀郷といひしを、世よいみびき弓の上手とかむ聞ゐる。傳へさる事もあ

玉造ハ玉ヲ用ユスル者ガ玉ヲ磨ルカスリシガク
漆殿　漆ヲ塗ル処　ニーハ　漆ヲモ染ル色

ろべし。かくこそおぼし志みぬる事を、忘れらるまじう
あらめ。こと一言ふてもをしへ承るべし」こたまはる〳〵
恐ある御とをせるり。御物語のはて〳〵、物の道志ばし
も急らせ給たぬ御心より、野山をきみかの え せ法師よ、
物とをせ給ふ事のかしこさよ。むのひ奉りてハ、をこが
まーく、家の傳るりなどとて、きこえ奉るべうもおぼえ
侍らず。まーてありがさき大宮仕をいるみ奉り、みおや
等のいつくしみをさへ、あだなるものよーて、年ごろの
よ世五よて、家をいでたるれあづら者の、弦ひく一つだ
に心よ留めしことも侍らず。
たゞ一言の忘れがさ和た、賞を重くし罰を軽くせよと

いふと、任ぜる者をはづのしめかむ、あやふしといふあ
ごがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしむ、人の心をよ
く買ひなすと雖、まことの情よりども覺えはべらず。寵
を減じて、人をあやふきよ落入るゝむ、將帥のさかしき
よて、國を治め、天の下を志るべき君の御心よあらず。軍
を出したまへる事の、あやしきまでがしこくませるを、
餘所かがら見聞き奉るよた、此方の御とひ許させ給へ
とて、額を板敷よもり附けて申す」君ゑみほこらせ給ひ、
口とく心さとき法師かり。今宵ハ月見る夜ぞ。物語今た
果してむ。人々とかたらけ取りはやし、曉のけて遊むむ。
まれ人を酒のまざるべし。志ゝ猿の中よ立ちまじりて、

特今の長ノ山ヤ
山ニ住ム鼠ノ
捨テ愛射トス

歌よめと云ふとも讀むまじ。ゐゐ我が前よ遊べ。風ひや
やうふるよも、飽のずのみ、物きたなげよ喰散す人々を、
あさ、このよもこそ。此の火とり、法師ふ參らせよとて、白
銀もて作りたる、猫の形志さるを、取傳へて君より給た
るとて、前よおきたり。志い猿(てこう)なな心たあし。鼠をざよ
え取らぬ痩法師ぞ爲よも、似つのむし、き御たまものぞ
とて、三度おしゐたゞきぬ。
武士ニ、猫ノアル法師ガリ来ヲ式ニトラメモ、ニ仏合ノ賜ブ
あした、御暇たまもりて立出づるよ、御館の人やどりよ、
誰ぞ殿のわらはべならむ。くゝり袴のもそ、朝露よぬき
そぼちて、いと寒げよをるを見て、これとらせむ。火埋み
て手足あたゝめよとて、彼のきら〳〵き物を與へて、
火鉢
御館ノ彼人設所
復朝ヲ世見ニ火鉢

返見もせず立去りぬ童打驚き是見給へ。見も知らぬ法
師の、見も知らぬ物をたまひつるとて、青侍よ見それ
ど、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰のて得させむ。ぬす
みや志つるといふ。更よ〳〵道のそらに、かゝる物やた
あるべき。あなおそろし。殿よ奉りて給へといふ。やゞて、
御館よもて參り、仕ふる近臣をよび出で、志の〳〵の事
なむまをす。いとあやし。大將殿の法師よたまもりしを、
いのでか童よも得させけむ。いぶのしとて、まづ急きて
聞えゐてまつる。君うちゑみ給ひ、かのえせ法師、あなづ
らしくをさあげなる物くきつとて、腹たゝしくや思ひ
けむ。我が門の前よもて行きつるよ。法師とて男魂なく

で、修行もえせぬるべし。されど、家を出で、猶身を守り、
オよ誇りて、野山よまどり、歌讀みてのみあるハ、世捨人
のすてらるべき淺ましさぞのし。一度けがしし物、その
童よとらせよとて、とりおろさせ給ひぬ。西行、後よ此の
事を人よ語りて云ふ。右府を、まことにねぢけさる君か
り。口よ蜜志さまへど、心よもはりのおもすろぞ。漢高の
大度、曹孟德の智畧あるに似て、天下の人皆、此の君ハ網
の中よ入れられさるを、我が佛の冥福といふ事を、生れ
るがら得させけむ。たゞ悲むべきを、神の御裔の、此の後
やう〳〵衰へさせ給ふむ。口惜き世の姿なるをとて、涙
とゞめがたくして、物語志ゝうきとかむ。心かき身よも

世捨人ノ心家人

出家ノ道ノ好サヌコラ如様ナコト時々キ遊ヒノマトデアル

仏トカクモノハ無身無心デアルニアケソレトナラズ

これを聞傳へてを、秋の夕暮ならずも、うちひそみぬべ
くなむ。

第二十二　花の歌　　西行法師

よしや山こずゑの花を見し日より
さゝろを身ふもそはずなりふき

第二十三　月の歌　　西行法師

かゝ〳〵よとき〳〵雲のかゝるこそ
月をもてなすかぎりかりけれ

第二十四　題志らず　　西行法師

故郷を見し世まもにずあれよけり
いづちむのしの人あきよけむ

山家集

吉野山ノ梢ノ花シ見テカラハ心ハ身カラ離レテ西ノ方ヘ行キ遊ヒ毎日花ヲ見暮スコトデアル

哲學ノ月ヲ友トスルノハ月ヲ持スルノニ、却テ故上モナキヨイモノデアルトモ云フ。高ナリ

「ソウ」ハ何ヤラ「ヒ」ガ「ハ」ノ人自分ノ首ヲ切リ人ヲ殺スヤウニ思ハレ子ヲ幼見トヲ家ニ残シテ出テモノナリ

故ノ歌ハ西行法師ガ大宴ヲ捨テ修ヲラナシ妻ヲ捨テ無家ニシバ自分ノ家ハアル中トナリシノヨモこすり

第二十五　驛

中島廣足

治れる世て、驛路の往きかひもにぎてしく、人宿す家て建てつゞけて、草引結ぶ思もかきものら、さすゞに打解けてしも寐られぬて、旅路の習かるべし。曉の鐘て何處もおなゞ響ゝて、いと疾く立出づる旅籠馬の聲々、枕がみゝ聞えて心地よげなるに、今日て天氣もよかなり。何がしの浦けなゞめ、如何ゝをか、のらまし。彼所の御社ゝも、こたびこそてなど言ひつゝ、急ぎおくる音のほのゝ聞ゆるて、あかさゝ寐たる旅人かるべし。家かる人々も起出でて、朝げの事ゝど、とかく賄ひあり〳〵程ゝ、やう〳〵物騒くなりて、物荷ひ行く男どもの、鄙歌うたふなど、いそゞてしげゝ聞ゆ。どばゝりありて、門の許ゝ引寄せつゝ、馬參りて候ふといふて、我ゞ乘るべきゝやと思ふもいとをかし。

第二十六　岡部日記

岡部真淵

あてれみやこゝありつる程て、あからさまなゞら、年のはゝ故郷に歸りなどき志けれバ、さのみもあらざりしを、今ハたをやをくも歸るまゞく思ひなしつれど、千里のをちゝ老いたるたらちねをおきまつりて、どみの事ありとも、いゝでか志らむ。志るともいゝでかとみゝ行きいたらむ。今やいゝかる事ゝのあらむ。いゝなる心ゝのまゝすらむなど、人やりならぬ胸さわゞれつること、日ごと

にありしを、世のさがもあれなる物まて、うつたへよ
忘るともあらねども、友がきもいで來て、あのき賤きも
きのひ（降）しけるよ、二つなき心のまぎれやすくて過しぬ。
此の秋もいざなふ人さへあれど、いでや母をも拜み、つ
まこはらのらよも逢もゞやとて、後の七月八日、つとめ
て立ちいづ。此のあらましいふ頃、人々別をしむとて、か
ら大和の歌、一百ばかり有らむかし。そもこと物よ志る
しつ。友がきのなごりなきにしもあらねど、契りおく日
いくばくならねど、先をゝまろゝ心よも、いさゝともお
もかえず。品川のうまやわたりも、海のつらもほびろか
ア。夜の雨晴れて白雲おほくかゝまるも、伊豆の三崎と

安房の大山とかり。此の所ハ袖の浦とぞいふなど、青田
かく奴の、みだりよいふををゝしき物のら、いかくまま
れ、とき洗ひぎぬ（衣）きむ日までも、其の名のもの（物）のしきや。朝
風いと涼く身よ志むよ、旅人も衣手（袖）さむし志ぞし猶
こゝろしてふけ浦の秋風」關路（大坂の関路）こゆるなどよみけむ。思
ひいでらる。ふドの山も未申（南西の方）の空よ見も。是ぞおのがな
ぐむる方なるよ、古郷人もこなゐをこそと思ふも、こた
びもうれし。をちつ（前年）年、東よ來にける程よ、東路よあり
と聞きつる富士のねを夕日の空よかへり見るのなと
おぐめて、限なく遠くも來よけアと、わびつるよハかを
れり。六合（ロクゴウ）の渡も玉川よぞあるらむ。和名抄ハ此の國よ

六坐郷あり。同ど所よもあらずや。此の水上よたば川といふ里有りといへり。詞のをみ濁りよつけて、古き名ゆる事猶あきらのなり。

程谷の宿過ぐる程、空くもりみ晴れみたゞならねバ、雨づゝみもるよ、暫くしてけしきやみよけり。藤澤のうまやよ宿らむとて行くよ、信濃坂といふ坂を下れバ、田の上山本などよ濁りたる水いと高きもこゝにもいたく降りよけるかりけり。大山を今もふりぬべき雲のふるまひなり。此の山ぞあふりの神よておをします。藤澤や野澤にごりて水上のあふりの山よ雲かゝるかり。つとめて驛をたつ。夜の雨よ道いとあしくて從者わぶ

ぬ。大磯小磯といふわさりを、よろぎゞの磯なるべし。夕つけて箱根山よかゝる。關までもくるしとて、畑といふ所よやどる。いとはや夜さむるれむ、ねもいらぬよ、瀧の音、鹿の聲うちこめたる山の秋風聞きあのされて立出でぬ。ほのぼれと明行く山ゆかひよりかへり見れバ、朝霧おろく立渡るを、海を見む心地す。關こゆる程、日さし昇りて、湖の面のどのに見わたさる。

けふを、何ぞしゆ國より、貢物おくるとて、さうあへぬまで行きのひさり。荷前の箱ゆをよもあど、ずして下るふ、ふりさけ見らるゝ海山の興あるにも、過し頃雨よ越えしをり、思ひいでらるゝ。そべてこ山を、雨ぞありあをれな

るはあし。こゝかしこ、くゆりいづる雲のうもきこゝ地よ、山々も面影ばかりぞ見ゆる。人の面より起ると吟じて越えつる、くるしからぬよ志もあらねど、あなをのしと見しもといふよ、人々も例のひがごゝ心よこそ。いぶせのるべき物ごのみなめり。籠よのるらむ山人よや、あつらへましかど笑ふ。からうじて三島、驛よいたる。古き歌よ、ちちの實は父とつゞけしも、木の實よて、此の國よありといふ人のありしゝむ、問ひもとむれど、見志れる人もなし。古郷のはゝそのかげも問ひあけどちゝのみなきぞかなしかりける。

けふも、雲まをひて富士も見えず。原のをくわたりより雨ふらむとす。富士川も、あをこそ渡るべきを、水のさやまさりなむ。夜をかけてだよ、蒲原のをくまで、いゑで行のむとて、夕つのさより、立ちまをふ雲のあしと共よ、いそぎつゝ行くに、空晴れて、おもをざるよ、月さやのにいでよけり。夜舟こぐふどの川戸よ霧はをて高ねふ以づる月を見る哉」夕の雲れいざなをざらましゝのバ、かゝる所の月を見ざらましを、心ありけりなどいひあへり。いぬれをゞめばゝのり、蒲原のをくよいきる。十一日きつた山をこゆ。何ごしの湖見るらむけゝきおぼえて、唐めいとる入江のたゞをまひゐり。詩作らましを、年頃いをざりけゝ」だ、なゝのくまてもだしぬ。興津の

濱過ぐるよ、海士のまてがたといふこと、此處よりぞ心得られしと、東方偐大人のがさられしを思出でぬ。げよもたごと云ふ物を繩して杓のあたこなたよかけて、おのが肩よ荷ひなぞらら、打ちくる波よさのひて、右左の手を繩よそへて、肩を動して汲むなり。古語よ右左ふたつの手をまてと云へり。又くみ來てを、をかごにうちそそぎて、又なぎさよ下りたちてくむ。見る人目拙くるしくいとまなし。古語、よくこゝろ得たらむ人よ、猶口づからの云ふべし。清見がさを、中々ことの葉もなし。夕つけて安部川渡る。うを〳〵霧ゆられる夕日の、さゞ波よかげろいて、駒のあゆきよ散りくだくる水は、水晶などのわき

たるやうに見ゆるを、清少納言が詞おもひいでられて興あり。

うつの山いとさのしけきど、昔の道よあらずと云ふぞ口をしきや。和名抄よ此の郡よ内屋といふ郷あり。今もさいへり。霧立ちていとくらし。夕霧よ行く先くらきうつの山うつゝはやみよこえまどひつゝくれ過ぎて島田宿よもどる。あをとふる郷ありけりと心いそぐれて、夜ふかくいでて、大井川わたる程、かの〳〵と明けもく。さやの中山を、朝霧わけむもめづらしかりなむとて、かちより越ゆ。さやの中山を、さや郡よあればあり。今の世、此の郡をさよといふを、よこなまれり。續日本紀養老

六年に遠江國佐益郡八郷を割きて、始めて山名郡をおくと見え、延喜式よ佐夜郡と書き、又かひがねをさやもみ〜のといひて、末よさやの中山といひ、古今六帖ふ、

東路のさやけ中山さやのふも見えぬ雲ゐよ世をやつくさむ」古もかゝる語勢多し。されバさやの中山といふよて、郡をさやの郡といふべきを知り、さやの郡といふによりて、さよけ中山といふ誤をもたゞすべし。

懸川の宿わたり、ものりあるかさ〳〵おとづれて過ぎぬ。夕つけて天龍川わたる。昔の歌よもあまの中川とぞよみたる。人々むのへよとて來つゝ、おい人れ事ちきよし先いひて、いとめづらしと、思ひたるけしきどもいう

れしくて、まれよ渡る天の中川あろ〳〵ふうれしきせよも袖ぬらしけり」くれ過ぐる程、岡部の家ふいとる。まことよ、門よりて待ちうけ給ふ。いときふき姪どもあど、もせ來れども、見ぬらぬ顔おれむ〜やあらむ。とみよもむつれず。なれしむありの人々ハ、髮の蓬も似ずおりぬ色れど、國ぶりの詞はみやちるのりけむ。いづれの所よりとも問むざりけるつまある人も、たハやすく來べのらぬ故あれむ、先子をおこせたるに、年頃へて見るに、およづけよさるぞうれしき。まことのいされることとて、なのつのしく嬉しと思へるけもひもあれなり。常も、志たしからぬさへ、問ひきて、日よ〳〵かさらふよ、庭

の蓬も露かゞくひまのありげなり。こゝふまで來りふけれバ、京よもとおもひぬきど、東よ契りつる日數しあきバ、こゝみえまうでぬを、やんごとなきあさり、あしらず申入り給ひねと、非藏人親盛などよ文つのたす。

第二十七　消息　　石川依平

こた賀茂眞淵翁の筆の跡なり。翁より内山眞龍ゞもとふおくられたる文よて、つゝみ紙ふれこ名をかゝきて、文のとぢめよた、名ハたるされねども、賀茂川の名よなゞれたる水ぐきのあとハさやのに見えよけるのな。」

第二十八　蟲　　石川依平

家なみたきたる都のをまひた、前栽もなどるなけれど、萩

そゝきおどゝ、さをゞのよをりたりがかゝるを、あたれと見ゐたる夕つのさに、たゝしき人のもとより、昨日嵯峨野ふもとめぬとて、蟲どもあまさ籠ふいきておこせたり。めづらのよて、とくアらたよびて、はなさせつゝ、なかるゞめをるふ、もとよりのよやあらむ。いまはゐりのよやあらむ。かつ〳〵鳴きいでたる〳〵と興あり。月さしけぐりてハ、まーて音もをみかくよ、はるけき野べまでおもひやられて、

第二十九　秋野の花　　藤井高尚

たよびをり、かきのぞふれバ、七種の花とむの一人のいひけむを、さる事よて、秋の野よさ紀さる花むげよ七く

花と見ゆ

さぞをかしくもありけろ。わきもかうりんだうなども、歌にもよまぬけにや。ものげなくぞおかゆる。その七くさの花に志なぐへを、さだめいもむとす。あるが中にすぐれたるも、萩になむ。枝ざしなども、いとえんに、花の色、こきも、うすきも、いとめでたく、葉もちひさくて、あてなるに、みどりの色うつくしく、かざありのものやもある。かゝれど、むかしの人も、七くさのはじめに、まづかぞへいで、萩を秋といひもやし、露におきかひて、萩のあそびせむともいへりき。さしつぎにも、尾花にこそ、この花に、花かずにもあらぬやうなれど、露をつらぬきとむる玉の緒の、うちなびきたるも、ものよりことに、あなをかしと見ゆ。夕風のあはれなる秋のけしきも、これになむあれど、をばながうれを秋ともいはむといひし人も、ひがことせざりけむと思ひ志らる。この二くさをおきても、をみなべし、名のなまめきたれども、にやあらむ。花の姿もいひしらずなつかし。さても、あさがほ、ふぢばかま、なでしこ、とりぐに見所あり。この朝がほといへるも、ききかうの花ぞ。色もえもいはずめでたし。枝のさまぞこちぐしきや。ふぢばかまといふも、きくなるべし。この花も、なでしこも、からのたねを移しうゑたる前栽のも、いとれとめでたく、野邊におのづから生ひたるも、こよなくおとれり。されど、あてなる花になむ。葛花も、さまかはりて、

ことぐさの下はふのらゝ見だてるけれど、これも、野邊の庵れ柴垣よはひかゝりたるかづらゝ、かの花のさ紀たるも、をかしう見ゆ。秋の花はさだめよ、まことゝも、いひえがたくあむ。さるも、一もとごとゝ、ひきていへば、かく其のこなゝのけぢめあるやうなれど、わづらふるゝ、あまた、咲きたるとも、いたくことゝ見え、近く見るゝ、いとよき花もあり。まゝ遠くて、なゝ見まさりもるゝ、ひとやうならず。曙、夕暮の露はまよひ、見渡したらむゝ、えんゝも、あもれゝも、をかしくもおぼえて、れづれの花のむおろかならむ。いづ方ふりもつともなく、はて〳〵も、かれもこきもみなよしとのみいふも、心

きたゝ花さためのはうせゝなむ。

第三十　赤坂御園の菊をよめる　久米幹文

鳥ぶなく　東の宮は、なにおへる　春花よりも、露霜の　秋こそまされ。雲の上は　玉のむらぎく、とりゝ〳〵は　匂へる中ゝ、志ら玉を　かざらへる山、あゝの玉を　よそへる山、黄玉　玉ぎく　このさねし山の、みねもを　まさりおとらず、色も香も　とろよろひたり。山なしと　いふなる國に、宮ばしら　ふとしきませば、大きみゝ　つゝへまつると、あきつ島　やまとの國は、志づめとし　いませる山も、ひゝれきて　けふ三つ山の、山さびいます。

白赤黄おの〳〵一本づゝ三本あるゝ皆七八百の輪をもてる大菊かれば山ゝ麓へたろいとめでたし

大君のめでけさのりよ菊の花
　　山となりてもつのへまつもり

中島廣足

第三十一　夜學

寺々のそや、鐘の響もをさまりて、皆人も寐たるよ、ゆとゝ嬉う、燈火あかくしなして、文机よ向ひたるいみじう心すみて、書見たりしあたりの、何心ふくて、過ぎしも思ひ忘られて、深き心ぞへあるくだりくも、おのづからときえらるべし。かゝげつくしても、猶ねぶたさも忘らず。あぶらさしそへつゝ見もてゆくよ、遠き世の人も、唯さし向ひ語らふこゝちす。さうし作りて、をのしきふしぶしあるも、ふと思ひえたる事ゐどをぞ、墨おしをりつゝ、書きつけなどするもをのし。鳥の聲も夜深きよやと思ふよ、いとゝくあけ離れたる忘ばしハとて、打眠る夢のうちも、あだしことならむやも。

第三十二　學の喩

伊達千廣

筑波根をや高しといふらむ。三吉野をや深しといふらむ。それ分けつくさゞ盡すべく、それ分けのゐらゞ登るべし。あてれ、はてもなくかぎりもなきも、學の道よゞ有りける。初山踏のほどよハ、見るもの聞くもめづらしく、いのでゞれ世の博士と仰がれむと、賤ゐうみ麻の儀むことゐく、いそしみつとめ、歌ゐど詠出でむよも、思ひかけずめでたき言葉も出來れゞ勞ゐくして冠得たら

筑波根云ゝ三吉野云ゝハ對句法の精格それ分けつくさバ云ゝそれ分けのゐらバ云ゝハ疊句法の精格なり

此の文此の二箇法格を以て發端を成せりかくて果もなく限りなきの疊語をして發端の文を受けて本編の主眼

を喚起し初山踏の程よハといいて初段の筑波根三吉野よ照應せしめて初學の徒の有様を述べ是ハこれ初山踏の麓の里よ花見つけたる程ろりといひて第二段を結成したるハいとめでたし

第三段ハ山また花等よ屬する言語を以て前二段よ應じ二段よ文をと、のへて學業の難き事を述べたり

むごとく、人もめで稱へ、おのれも高々と心傲せられて、今よも世の博士と仰ぎろべく思ふめり。是ハこれ、初山踏の麓け里よ花見つけたるかどなり。」かくて三とせ四とせ年積りゐくよ、初のごとく進むべくもあらず。讀むべき書ハ、目の前ふ山なす高く積重り、珍しと思ひしことも、常よありてもめでたくもあらず。勢盡き志倦みて、たゞ苦き事のゑ多く、それのみのち。或ち妬まれ或ハ譏られ、青葉ごもれる梢の空蟬がしまし記事さへきこえ來れむ、いのよかく苦き道よち出でたちけむ。ハのでとりかへさむよしもぞな。ゐど思たるゝぞのし。是ハこれ高根の花見むとて、岩根こゞしき山路よもき惱むほど

第四段ハあれ吾ゞ學の徒云ゝ山口の花ようかれ云ゝ等の語を以て全編よ呼應せしめて結尾を成せり

なり」か、れバいとく屈したるち、さしも思ひあぐりし志も、沫雪ふす消えうせ、あるちはつのよ歌ゐど詠みちらして、月花ようのれ遊び、空言のゑひゞらぎ居るふど、皆此の山路よ倦みたるものよて、これゐむ世よ比類おホのうけるゝ。さるを、今ひとときぎみ堪へきのびて、志した る高根の花を折らでハ止まじと、赤駒のあゞきつまぢくことなく、いそしみ勉むる人ゐむ、いと〳〵有りがたきかゞりよありける。」あれ、吾ゞ學の徒此のことゐりうまく悟りて、山口の花ようかれて、水分の岩ゞ根、ふみならす道よゐ倦みそ。是ち此學の道ゝ此みのち。おホのた世のさまも。

第三十三　契沖の古學

輕島のあきらけ宮の大御代よ、書ちふ物はじめてまゐき、磯城島の金刺宮れ大御代よ佛ちふ物ゐとり、漢國の教れ道を、物たらひよきことゞ思ひ、佛たふとぶことをめでたきことゝして、此の二つれ道のあゐのーた四方よはじこれることなく、難波の海べよ、蘆原れおひーくことの如くかむありける。」漢れ道ハ下より根をへ、佛の道ハうへよりをいゐて、大御國の大御手ぶりむ、こもりづれ下よのこし、志る人もなくふりよて、代々をーへぬれば、かーこきや神代の御ふみをとくよもさのーきからことぶりよときまげ、よーるき佛ごゝろよとりるーもゐる世とるむなりよける。」かれのの磯城島の御代よ、ほとけをまつらバ、神の御こゝろかーこーと、堀江の宿ゐりよ棄てさせ給ひ、大同の御代よハ齋部なふぐーの宿祢ぞ、漢字のいでくるゑ、古事ゐすれぬべきはーと、なげのせることゞもゝ、今なむいちゞろく思ひあゐされける。志のるを元祿のころかひ、難波の契沖の大人ハ、佛の弟子として、その國字を學び、漢國の書をーもよく見渡ーて、御國の遠つ御代の手ぶり、言靈のたすけさ記むふことゐりをし、つだらよさとり、言語れゐふとむべきことわりをゐむかむゞへ志りて、かりごもの世々久にみゞれてありつる假字づのひを、たゞーみちびき、あ

さぎりけまどをしかりつる歌のこゝろをもねもごろに、と紀をしへられけるより、ことおこりてふむ、世の中よ古事まなびをる人々、つぎ〳〵ふあきつぎて、かけあしどもの、志ゝさやれるところ〳〵をとげる心の敏鑑もて、かりそけのきゐけ、水底ふのくたづねて、真珠、白玉たゝく尊き、遠つ御代の大御手ぶり、神代の古事まで、やうやう光みえわく世となむなりまける。うれしきのもたふときこのもそも〳〵、かの漢け道をはじめておこなしけるも、難波の高津宮の御代佛の道け世まさゝえけるも、難波の四天王寺ふるを、その難波よしもありける、契沖のうしけ功より、神の道けあらはれそめける事

契沖、難波人

よ、堀江のふかきよしあるわざはふむありけらし。

第三十四　萬葉代匠記序

僧　契沖

みかの河、その水の尾より出でて、流き久き源の朝臣、物部の道をあらはし給ふいとまに、文の道をも好ゝゐまひて、ひだり右をそなへ給ふ。五つの車、牛ハあへげど積みつくさず。四つの庫、棟をさゝへてをさむゝのりふるを、あゝず見給ふとて、菅の根け春の日よも、ゆふげの時をうつし、山鳥の尾け秋の夜よも、ねよとの鐘をかぞへ給てで、からやまとの歌も、月雪の時よつけたる、なさけの世よ聞ゆる、櫻川け波の花、こと葉の林け枝よかよひ、なさかの海の玉藻、心の池け水ようかべり。志のあろの

そなあらず、志さのうきしま、誠をくおきをおきて、つくば山の高く神さびたるをとり給ふと、やまと歌の中ゐむ、ゆきて、萬葉集をもてあそびて、弓とともゐ手にとり、つるぎとひとしく身をはなち給ふことゐし。そも〳〵、古くより此の集をむ、志むすの月夜、見る人まれはして、たまさかゐ見る人も、峯の白雲たゞよそ目かりけきば、中ごろ是をとくとせしものゑ、へみゐ足をゑぎきて、れとゞ狐の疑をむすべり。此れことを惜ゑたまひて、下河邊長流といふもの、つゝさへおける文ありて、よくこの集をとくよゝをきゝ給ひて、これゞ抄、つくろべきよゝをおかせらる。筆をとらむとする折しも、をこゝ心地そこ

なひて、ためらふとせしゐどゐ、いつとなくあつ志れて、年經て身まゐりぬる事ハ、されゑひゐくも侍るゐな。惜むべきことゐゞ侍る」。こゝゐやつゞれ、彼の翁ゞともがきの教ゐまゞをれる事、年を十といひつゝ、みつのをまべゐ同く志ほされぬゐ、ども、もとよりつゞゞの袖ゐして、尾花よりもせゞけれむ、何のひろひおける、みるめもゐきを、くゞつむゐ。このらむとい志り給ゑで、聞きけることもやある。思ふやうもやあると、木こりゐもとひ、草かりゐもはゐりたまへれば、かの翁ゞまだいと若ゐりし時、かゞばかり志るしおけるゐ、ゑのがおろゐなる心をそへて、萬葉代匠記と名付けて、是をさゝぐ。多くもお

れぞむねよりいでて、憚おかけきど、なめがさのこわり、なめげなる罪をわすれて、あしほの山れ、あしかるとがをも、ゆるし給ふべし」。誠はざえた、あしつぐよりもうすくして、かををほいの木ばのりあつけきど、たゞこれ芹をつみて、ちづくの田井を、とばの淡海はそへ奉るものゆりと、あられふり鹿島崎の、かゝこまり申すなむありける。

第三十五　車　坂正臣

むかしも今も車こそ志ある多ありけれ。大君のめするるを、いたゞきよ竹の實をはむ鳥の、ゐるもたふとし。昔むあまたの人れ、なぞえとり綱曳きおどして、早きまわらせ、その名も輦とのいひけらし。今も馬まひかせて、いとかひ〳〵しくぞ渡りたまふめる。葱花輦のからめき、檳榔毛のおもゝ〳〵しき、今も目おれぬものとおりぬ。蒸氣車も、千里の野山をも、只時の間よりきかひて、いみじう心ゆくものあり。

馬車のさわおふ聲、いさましくて、渡るもわろからねど、ゆゑゞ行く跡より追ひかゝりたるぞ、をこしなくきふりかへりたるゐ、中おるぬしの面やうの、玻璃の窓より見えすきて、はやう識れる人おるゐ胸つぶれつゝ、帽子ぬがむとすれど、遥よ打過ぎぬる、あいなくさうゞしき心地す。わきも人なるを、などのかゝる車ふて、のりえざ

らむとおもへど、齒こそかまるれ。されどもろさきて、人の同乘などすきバ、所せくいぶせくて、志むぶきも心まかせず。口のかなどやもれむと、物語もえせでまもりゐたる、何のたのしきことともなしゝや。到る所ごとに、人々ゐやまひうなづけど、おのれをたゞ、虎の前にたちけむ狐のこゝちして、こゝろも安からずのし。

辻車などいむるゝきにはゐりとも、心おのでひとりのりたらむこそ、はるかにまさりぬべけれ。たゞし、さやうに車も、晴れたる日こそあれ。雨雪などのをりも、ほろの損れたるより、志づくのもりきて、きぬもたへがたく、又も、そのほろの裏に塵つもりたるを、はらゑでおほひたるにや。帽子うちあてゝ、けがるゝ、ふどの、腹たゝしきのみかた。膝の上におほいたる、氈やうの物は、あせのかもちやのふるも苦きに、宮の内は、更ふり。何の殿、くれの邸、などいふあたりに參りて、いでゐる人々は見られたるも、おもてもさと赤みぬるし。散れたるおんぼうをきて、狐かくをきたる人とたちつゝ、わろびれざりし例もあれぞと、志ひて心ふりおこして、常に乘渡るものゝ、あれこの車や。わゞ家に、もたるまてだにあらましのむ、よろづふたよりをのらましをとおがもる折々多かるも、なかいさみなき子路とや笑はれまし。

第三十六　車の直路　本居豐穎

明治廿三年三月十六日あり

三月十六日の夜をこめて、新橋なる停車場より到りて、魚住ぬしと共に汽車ふのる。夜明けて、やう〳〵日かげのさし昇るまに〳〵、雨も晴れざまになりたる、いとうきし。横濱までの道ハ、をり〳〵ゆきかひなれたるを、こゝよりさきの汽車ハ、此度、初めてのきるなきむ、珍きより、東海道のもきかひせしも、既より三十年の昔かれむ、藤澤大磯などのうまや〳〵を、車の中より遥より見やるもなつかしきこゝちす。

國府津より、やう〳〵昇行く山道も、車のもゝみ杜静のなるのみよて、なか平のなる道を行くが如し。谷川の流を、いく度とも知らず、こえて、水のたぎち、左よあるうと思へむ、右よあり。右よ流ると見れバ、忽又左よあり。おかき小き巖どもの、横ほりふせる中を、砕けつゝおち下る水の氣色、いとおもしろくて、むあし、木曾の山路を過ぎつるほどの事ども、思ひいでつ。隧道いと多くして、夜晝さだめかきさまなるよ、播磨の濱づとかる、伊藤翁のから歌思ひいでて、うちずんじるどす。

今日も空曇りて、なか折々も小雨むうちふぶけむで、不盡の嶺ハ見もべくもあし。佐野を過ぎても、又やう〳〵、下りもく山路もきろく、車のもゝみいと早くして、吹放ふ烟の、窓の外を過ぐるも、殊よはげしくおぼゆ。天がける龍よや我ハのりつらむはやさめ競ひ雲いぶくかり。

岩淵の停車場を過ぎて、薩埵峠山のほとりを過ぐるかど、田子は海づら廣く見ゆ。さるゝ小、三保の松原の、遠く引きたへゐる景氣も、昔、この道をゆきかひし時も、いとおもしろしとこそ思ひしの。今は夢ごゝちして、うち渡す三穂の松原つら〳〵思ふも遠き身のむかしかな。

第三十七　汽車

本居豐穎

いふかひ世を　かへりみ思へば、十日あまり　来經て通ひし、五十あまり　三つの驛も、一日くれ　一夜あけぬる、夢の間は　たゞ走りきぬ。杖つきて　あへぎも登り、船うけて　からく渡りし、山川も　ありとはかりに、あぐら居は　居ながら過ぎぬ。國原も　さくもりぬらし。山川も　よりあひぬらし。車路のため、

第三十八　嚴島紀行

秘所　敦子

十三日はゝつく島はまうでぬ。かねても船路をいとおそろしき者は思ひて、かう日毎はかさがる山をゆき廻りても、なほ浪路はまとも思ひかけぬを、此の島はありさまはいとあらう見まほしけきを、おそろしさも忘れて、いそぎのりぬ。今日しも浪風いとのどかはて、陸路をゆくはかなる事しなけれど、おもひは外にめづらしき心地して、遠近の島あど見渡すけしき、いとむのさかし。海のおもては青々としてたゝみなどをしきたるやう

よくらげといふものゝ、いみじう白く、はなの散りたるやうなて、たゞよひうのべるも、いとめづらしうをゝし。島近くなりぬれバ、おかきなるいもほあまさ、海の方よさしいでて、屏風をひきめぐらしたらむやうなて、けしきある松どもの生出でたるも、どりぐにあゝずおもしろし。此の宮ハ有りさま、繪よかきたるよもはるゝに、まさりて、まことよ此の大やまとの國よて、三景とゝいふらむ景色、ことゝりふありがさくゝむおぼえし。沖つ浪たつの都のおもかげをうかべて見するいつく島山。あゝぬかどよしもこぎたなれて、いとくちをしう、かへりみのこせらる。こたびも風をこしたちて、こゝちもいとあしかりき。末のさがりばかりよ、くはといふ港よつきしかど、こよひやどるべき地も、まゞいとものゝふりけれバ、道のほどよて日もくれてゝぬ。

第三十九　松島の記　久米幹文

我が大八洲國の東ハ海よ、伊豆の七島ハあれども、北ざまふ二の總ハ國常陸をへて、陸奥よ至る間ハ、一つの島だにかし。さるを鹽釜浦よいさりて松島あり。その島の數、いく百千からむ。よみもあへず、いとあやしき處かり。むかし日本武尊の、蝦夷をことむけたまふ時、御船よてあしの浦をめぐり、たまの浦を横ぎりて、竹の水門に泊てたまへりとあるを、此のゆさりかるべし」。一と世、宮城

野のあたりは、旅ねしつるころ、いとものしけれど、舟ぶ
のりてゆきみるは、あまさの大き島小き島々ハ、三里四里
もあらむとみゆる浦の、ところせきまでおゑ立ちたる
も、いとおびたゞし。其の島はおひとしたひさるハ、みな
老松なれて、あだし木もなく、浦波のあらふも志ろく、いと
かどたのくあらされて、土といふものもあらゞとみゆ
るは、千年もへたらむ松の根ハ、あらそにいねをまと
ひて、長き枝のかびきさるかど、いとあやし。雄島の宮屋
もかさぶきて、元の僧なゞしの、草はかける碑も苔ふ
のし。五大堂のかけ橋を、人のあやふげはなさるもをの
しく、蝦夷人の、昔をみつといふ岩屋なども見ゆ。されの

雄島ハ、昔尊ノ船ヨツケラレタル故御島トヨル

君公
仙名ナリ
仮住ホトモ思ハル
彼
指
彼
ドキ
ヤキ
ヤキ
ヤキ

かゝ、みゝ、言

かう殿のつくりといふ、觀瀾亭はやどりてこれバ、こ
の世はあらぬなそりとおもはる。あまさの中はも、や
や高き島山もあり。やどのあるゞゞ、何の島くれの島か
ど、およびさしてをしふれど、その名ことゞく聞きも
るべくもあらぬ。をさゝを去りて、北海の千島は至る
までハ、また島なしといふもあやし。いのなる神のかゝ
る島を、こゝと伊豆とにつくり立てゝ、何はざをこの志た
まひけむ。ふるき風土記などのはこりたらむはハ、さる
故よしも志られむを、ゝとくちをし。をるかある歌まく
らとのゝ思ひはとりしは、このごろきけど、これ近きは
たうより、伊達、忍夫をこのけて、都まで例の鐵の道を志き

つゞけて、ゐとゝき車をはしらせむとするどいふめり。立ちかへりてもゆき見むとおもへど、うれしき世ありけり。

第四十　言志

久米幹文

たま〳〵ゝ男と生れしだにうれしきに、かゝる盛なる新代にあひ奉るも、まさなく尊のりけり。もし女にてあらましのむ、夥多の人ゐまどらひ、遠きさかひの海山など、え見ありのむやも。治りなぎらも末ざまの世も、人のかどもあらをれて、物のはえなからまし。はさまりぎしき世なりむにも、いかゝうれしう、なげかしうのらむあし。さるを、早う五十年あまりは昔にあれいでて、故將軍のまつりごち給ひし世の、あらましをも見しり、軍の庭にものぞみて、矢さけびの聲、玉のおとなひをも聞知り、今まさ遠き世にも例まれなる、大御代にあひ奉りて、世界のあらゆる國々の人らも來つどひ、めづらかなる事ども、行されて、年月にひらけ行くさまも、いかにめでたく尊からざらむ。その上ゝ、一國の堺をさへ越えがたのりし身の、今ゝ心のゆくまゝに、何處まであくがれむもいとたやすし。ましていち早き、船も車もおもひのゝ儘なるをやゝげにかぎりなく心ゆく御代なりけり。たゞ口惜きはよそひやゝ傾きて、目くれ心まどひ、足もとろぐめれど、思ひ遥にゆけども、身は家庭をはなれがたし

やせめてもあしなくして千里を走るといふ、文字めかしき物をかきつめて、御代のさかえを天の下ならしめ、ありしねがらの國ぶり、千萬年の後よつたへむと思ふも、例の志れ心よやあらむ。

大丈夫と生れしからは言の葉は

一節をだに殘してしがな

中等國文五の巻上終

明治二十九年十二月五日訂正再版印刷
明治二十九年十二月十二日訂正再版發行
明治二十九年十二月廿八日文部省檢定濟

尋常中學校國語科教科用書

中等國文全拾冊
各定價金貳拾貳錢

編纂者　東京市麹町區麹町二丁目十四番地　井上賴圀

編纂者　同　市麹町區中六番町二十九番地　逸見仲三郎

發行兼印刷者　同　市京橋區南傳馬町一丁目十二番地　吉川半七

版權所有

所有權

明治廿一年十二月廿八日文部省寄宿舍
明治廿二年十二月廿八日印刷
明治廿二年十二月廿八日發行

東京市麻布區南部町二十一番地
同　吉川半七

東京市麻布區麻布二十六番地
同　藤貝仲三郎

東京市麻布區麻布二十二番地
同　井上鍵國

春常中學校國語教授用書

金壹錢　金壹錢
中學國文教授用